
ひとごろしに恋をした

イシグロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひところしに恋をした

【Nコード】

N6894R

【作者名】

イシグロ

【あらすじ】

暗殺を生業とする組織、式の一員である睦月こと創真。そんな彼に恋をしてプロポーズし、晴れてその妻となったひより。彼らと彼らを取り巻く変わった人々の、日常のはなし。ぬるいですが流血描写が苦手な方はご注意ください。更新速度はものすごくゆっくりです。

s c e n e : 1 「 1 」

スタジアムでは野球試合が行われ、観客席はどこどころ空席も目立つが、S席はそのほとんどが埋まっていた。

出入り口付近の席に腰掛け双眼鏡をのぞき込んでいた男は、探していた人物を見つけて顔をあげた。改めて肉眼で確認する。男から七列前にその人物は座っていた。

どこにでもいるような、小太りの中年男だ。彼は野球観戦を趣味としており、このスタジアムで試合が行われる際、必ずと言っていほど観戦した。応援しているらしい球団のキャップを被り、鼻屑にしている選手の番号がプリントされたタオルを首から下げている。すべて、事前に確認し、頭に叩き込んだデータのとおりであった。

そのデータの内容と、視線の先にいる人物の姿かたちを当てはめていく。現時点では、相違点はなかった。

最後までデータが正確であれば、5回裏の防御の際、彼は席を立つはずだ。どのようなこだわりがあるのか知らないが、彼は観戦の際、いつだって5回裏の防御で用を足しに席を立った。

男は無感情に彼を観察していたが、やがて彼が席を立ち男の脇の通路を通り抜け歩いていくと、何食わぬ顔をして男もまた立ち上がった。五メートルの距離を置き、その後を付ける。

彼がトイレに入っていくのを見届けると、男は身近な壁に背を預け、黒いジャケットの内ポケットから携帯電話を取り出した。仕事関係の人物へメールで連絡を入れ、周囲の気配を伺う。トイレに彼以外の気配はなく、通り過ぎる人々がトイレに入る気配もなかった。連絡を終え携帯電話をしまつと、トイレ内へ踏み入る。内ポケットから手袋とマスクを取り出すと、それを装着する。彼はどうやら個室に入っているらしく、一カ所だけ個室の扉が閉ざされていた。

水の流れる音の後、個室のドアが開く。彼の目が男をとらえると同時、男はその顔面をつかむと個室の壁に押しつけた。だん、と鈍

い音が響く。素早くもう片方の手でドアを閉ざした。鍵はかけない。驚き戸惑う彼は、何かをわめき暴れていたが、その声が男の耳に届くことも抵抗が実を成すこともなかった。ただの一般人の抵抗など、男にとって片腕一本でこと足りる。

袖口に仕掛けていたナイフを、するりとてのひらへ移動させる。標的の顔を押しさえていた手を放す。現れた顔には様々な感情がにじんでいた。それに構わず首筋へと視線を移動させ、もう片方の手にあるナイフでそこを裂いた。皮膚を貫き、肉を裂き、血管を切断する感触が伝わる。後ろへ跳躍すれば、先ほどまで立っていたその場所に鮮血が降り注いだ。

ごと、と、彼の体が崩れ落ちる。床のタイルをゆつくりと血が流れていく。標的の呼吸が徐々に弱まり、やがてそれが止まったのを聞き届けると、男は手袋でナイフの血をぬぐい、マスクを外し、それらを内ポケットへ収納した。きびすを返し、トイレの出入り口へ向かう。バケツやモップを抱えた清掃員とすれ違った。

お疲れさまです　清掃員の唇が動く。男は軽く顎を引いてそれに応じると、何事もなかったかのようにその場を後にした。

トイレのドアは「清掃中」の札と共に、固く閉ざされていた。

広々とした室内は、入ってすぐに黒塗りのデスクと革張りのイスが目に入る。そこから視線を左へずらせば隣室へ続く簡素なドアがあり、その奥には給湯室まがいの一室がある。反対に右へ視線を向ければ、ソファとローテーブルがあり、ときおりそこで眠っている青年は今は不在であるようだった。

デスクとイスの背後には広い窓ガラスがあり、その向こうには街並みが広がっている。眼鏡をかけたスーツ姿の男はその前に立ち、あたりの景観を眺めていた。おもむろに口を開く。

「いやあ、やはり睦月に頼んで正解だった。文月に任せるのは不安だったんだ」

ノックをすることもなく入室してきた男、睦月は、ジャケットの内ポケットから取り出した黒い手袋を、ひよいと黒塗りのデスクに投げた。手袋に付着していた血液は凝固し、黒地にまだら模様を作っている。

「……他の奴らは、出払ってるのか」

「君と文月以外、みんな仕事だ」

「霜月もか？」

「情報収集に多忙でね、一週間ほど戻らない。ほら、睦月と文月だけだろう？」

「もう一人いるだろう。極月ごくつき」

スーツの男はようやく睦月を振り返ると、肩をすくめた。

「私はもう引退した身だ。現場のことは君たちに任せるよ」

革張りのイスに腰掛けると、極月と呼ばれたスーツの男は、黒い手袋に視線を落とした。睦月が仕事の際に使用したものであり、組織から支給されるものだ。それゆえに、破棄する際はこうして総括者である極月へ返却しなければならぬ。

「……葉月は、まだ補充できていないのか」

「残念ながら。いい人材がいなくてね。心当たりがあれば、紹介してくれないか」

「ないな」

「はは、だろうね」

式という名の暗殺組織を束ねるのが、目の前の男、極月だった。

年齢は恐らく三十代ほどだろうが、眼鏡の奥の眼差しは十代の少年のようにも見え、しかし浮かべる表情はときおりひどく老成して見える。加えて芝居がかった言動が、彼を年齢不詳に見せていた。

式は十二人の構成員から成り、それぞれ旧暦の名が与えられる。

どの人物も極月が自らスカウトした者であり、それぞれが有能な殺し屋だった。式が設立されて十年は経つが、いまだにただのひとりも仕事を失敗していない。それどころか全員が五体満足で存命なのだ。式は順風満帆だった。葉月が辞める、四年前までは。

「なかなか腕のいい狙撃手に巡り会うことができない。人材探しの旅に出かけるべきか迷っているよ」

極月が冗談めかして言う。過去に本当に人材探しの旅とやらに出かけ、空いていた旧暦を埋めたことのある彼が言つと、冗談なのか本気なのか判断つかなかった。

「呼び戻せばどうだ」

「一般人に戻ってしまったからね、無理だよ」

「だろうな」

四年前、葉月の名を持つ人物が、式を抜けた。極月も同意の上の引退という形だった。だが引退するには葉月は若く、また、実力も申し分なかった。暗殺者らしからぬ朗らかで無垢な性格で、時にはそれが災いし任務に支障を来す場合もあったが、しかし引退するほどのことでもなかったはずだ。

「葉月が埋まるまで、しばらくみんなに多く働いてもらうことになりそうだ」

「金が入ればそれでいい」

「睦月、君には十分な給料を振り込んでいるはずだけど……もしかして、また映画館にばかり入り浸っているのかい？」

「映画館は素晴らしい。一日中いても飽きない」

「本当に好きだねえ、映画。まあ、君が給料を何に使おうと自由なわけだけど。ああ、今回の分は、いつもどおり来月の十日に振り込んでおくよ」

うなずくと、睦月は社長室のようなそこを退室した。大きな窓から日が差し込む廊下は明るく、ともすればごく普通のオフィスに勤めているような錯覚を起こすほどだ。しかし睦月にそのような経験

はないので、あくまで想像でしかない。

エレベーターのボタンを押して待つ間、睦月の思考を埋めていたのは先日公開されたばかりの映画のことだった。

s c e n e : 1 「 2 」

ひと月に一度でも仕事を行えば、その金で数ヶ月は遊んでいることができた。使い道のない金に困ってマンションの一室を購入し、ホームシアターの環境を整え、書斎の本棚を特注したが、それでも金は余っている。余った金で家具をいいものばかりそろえてみたが、元より映画と本にしか興味がない睦月にとって、生活環境がランクアップしたところでさして意味のないことだった。

いや、ひとつだけ得をしたことがある。アパートからマンションへ引っ越したおかげで、駅前の大型書店に歩いて5分で行けるようになった。おかげで暇さえあれば書店へ通っている。店員とはすっかり顔見知りになった。

仕事を片付けて一ヶ月後のある日だった。その書店で本を購入すべくレジへ向かっていると、真横からぶつかってくる誰かがいた。仕事中であれば回避はもちろん反撃だって可能だが、あいにく仕事中でない彼はただの人だった。

「ごめんなさい……あ」
ぶつかってきた人物は睦月を見上げると、丸い目をさらに丸くさせた。

「お久しぶりです、睦月さん」
「……葉月」

小柄で華奢なその人物は、かつての同僚、葉月だった。狙撃の腕に優れ、裏社会を生きる者らしからぬ汚れなさを持つ、まるで少女のような女だった。童顔がいつそう彼女のあどけなさを引き立てていたが、四年経過した今も、それは変わることがなかったようだ。

「覚えてくださっただんですね。うれしいなあ」
「そうか」

「睦月さん、このあたりにお住まいなんですか？」

「ああ」

本来ならば裏の顔を知る相手に住所など教えることはないが、葉月はすでに身を引いている。教えたところで問題はないだろう。今の彼女は、一般人なのだ。睦月の答えに、葉月はぱつと顔を明るくした。

「わたしもなんです。って言っても、家賃が高いので、引っ越そうかと思っただけですけど」

葉月はそう言って、手の中の雑誌を掲げてみせた。賃貸情報誌だった。

「昔のお仕事なら、どこに住んでたって平気なんですけどね。今のお仕事、そんなにお給料たくさんじゃなくて」

「俺の記憶が定かなら、葉月は貯金をしているんじゃないか。いつだったか、彼女自身がそう言っていたのを思い出す。記憶力だけは、仕事中でも私生活でも働いていた。葉月が微笑む。

「また覚えててくださっただけですね。貯金は老後のためなんです。今は切り詰めて生活して、老後にいっぱい遊ぶんです。毎年、海外旅行にいくんです」

葉月は拳を握ると、むん、と気合いを入れた。睦月には理解できないが、どうやら海外旅行に憧れているらしい。

「あ、それはそうと、わたしはもう葉月じゃないですよ。今の葉月さんに失礼ですよ」

「次が見つかっていない」

「そうなんですか？」

「だから葉月と呼んでも支障はないだろう」

「……わたしは今、呉原ひよりですよ。本当の名前です。ねえ睦月さん、よかつたらひよりって、呼んでください」

どうやら彼女は、本当に一般人に戻ってしまったようだった。教えられた名を記憶する。呉原ひより。

「それでは睦月さん、またお会いしましょう」

ひよりは手を振ると、レジカウスターへと歩いて行った。列を成すそこへ混ざると、小柄なその姿はあつという間に見えなくなった。

ひよりに再会したのは、十日後のことだった。

近場のスーパーマーケットへ向かい、目当てのコーナーを目指し店内を歩いていると、偶然にその姿を見かけた。

「二十歳になってからまた来てちょうだいね」

「もう二十歳とっくに過ぎてますよー」

「またまた冗談言っちゃって。どう見たって十八歳でしょ、あなた」
「違いますよ……」

酒類コーナーで、中年女とひよりが向かい合って言葉を交わしていた。声をかけるべきなのだろうか、迷っていると、睦月に気づいたひよりがぱつと表情を明るくした。

「睦月さん！ ちょうどいいところに」

「……どうした」

声をかけられては無視することもできず、仕方なく二人へと近づく。中年の店員は、睦月を見て「まあ」と感嘆の声を上げた。何に対する感嘆なのか、睦月にはわからない。

「この店員さんが、わたしが成人してますって言っても信じてくれないんです」

「ああ」

ひよりの外見は幼い。式に身を置いていたころには、すでに成人していたと極月から聞いたが、知らなければ女子高生だと思っただろう。

「睦月さんからも、言ってもらえませんか？」

「なあに、この子、未成年じゃないの？」

ひよりと店員二人に迫られ、思わず一步あとずさりながらも、睦月はうなずいた。

「成人している」

「あらやだ、本当だったの。ごめんなさいね、あんまり若く見えるものだから、十八か十九だろうと思っちゃって」

「いいえ、よく間違われるから、気にしないでください」

店員は手に持っていたカクテルの瓶をひよりに渡すと、ぺこりと頭を下げ去って行った。ひよりはそれを買ったカゴに放り込み、ほっと息をつく。

「睦月さんが来てくれて助かりました」

「……大変だな」

「若く見てもらえるのは嬉しいですよ。今回みたいに、困ることもありますけど」

「そうか」

「睦月さん、お買い物ですか？」

ひよりが睦月の持つ空のカゴへ視線を落とす。うなずけば、彼女は首を傾げた。

「なんだか、変なかんじですね」

「変？」

「だって睦月さん、普通の人じゃないのに、普通の人と同じようにスーパーで買い物してるんですもん」

「……いや、職業が特殊というだけで、俺自身は普通だ」

切実な思いを込めて否定をすれば、ひよりはそうかなあとまたも首を傾げていた。

睦月自身、自分は普通だと思っている。裏の社会に身を置いてはいるものの、とりたてて奇抜な性格でもなければ、一般常識だっただけで備わっている。つもりなのだが、一般人であるひよりに首を傾げられると、その自信も危うくなってくる。

「それはそうと、今晚の献立はもう決まっていますか？」

「まだ考えていない」

「じゃあうちに来ませんか？ お礼も兼ねて、一緒にお鍋でもしましょよ」

「いや、それは……」

「今日ってなんだか底冷えするじゃないですか。だから、お鍋食べたいなあって思ったんですけど、ひとりじゃ寂しいし……ね、いいでしょう」

ひよりは自らの発言に自分で目を輝かせ、睦月を見上げてくる。表情こそ変化はないものの、睦月は困惑していた。

彼女が式に所属していたころ、多少の会話を交わしたことはあれど、そう親しくした覚えはない。二度ほど共に仕事を行ったこともある。だが、それだけだ。彼女は誰に対しても明るく挨拶をし、自ら声をかけていた。睦月だけが特別ということとはなかったはずだ。

なのになぜ、数年ぶりに再会したかつての同僚を、こつもたやすく食事に誘えるというのだろう。それも、自宅に。さらに、睦月は男だ。

最も睦月は、他者に対して老若男女という概念を照らし併せることはない。彼にとって他人は他人でしかなく、姿形の差異や性別を認識することはあっても、その事実が自身に何らかの影響を及ぼすという考えに至らない。

つまるところ、彼が女性と二人きりで過ごしたところで、間違いなど起こるはずもないのだ。

だが、一般的に見て男女はそういうものであることくらいは理解している。だからこそ、睦月は困惑した。

「それは……」

「あ、もしかして、恋人がいるんですか？ だったら、いくらわたしみたいなのが相手でも、二人でごはんってだめですよね」

どうやらひよりも、男女関係における一般常識は備わっているらしい。思い返せば、彼女は式の誰よりも一般人だった。当然といえば当然である。

「いや……恋人というものは、いない」

「じゃあ大丈夫ですね。睦月さんのカゴは、戻しましょう。いろんな食材入れちゃおうと思ってるんですけど、何か苦手なものってありますか？」

ひよりは睦月の背を押しカゴを元あった場所へ戻させると、さっそく精肉コーナーへと歩きだした。流されるままに小さな後ろ姿を追いかけ、断り文句を考えてみたが、ある部分で人らしさが欠けている睦月に浮かぶはずもなかった。

s c e n e : 1 「 3 」

ひよりの自宅であるアパートは、スーパーマーケットから歩いて十分ほどの住宅街にあった。存外に近い距離だ。

「散らかつてますけど、どうぞ」

ばたばたと軽い足音をたて、ひよりが室内を歩き回る。2DKの空間は十分な広さがあり、かわいらしいデザインのテーブルやポツポツな色合いのカーペット、ところどころに置かれたぬいぐるみなど、いかにも一人暮らしの女性の部屋だった。多少散らかつてはいるものの、生活感があり人のぬくもりを感じさせる。無機質さが漂う睦月の部屋とは大違いだった。

「すぐ支度しますから、座って待っててくださいね」

「手伝ったほうが、いいか」

「いえ、大丈夫ですよ。テレビでも見て、のんびりしてください」
イスに腰掛け、出された茶に口をつけながらテレビの画面を眺める。テレビではバラエティ番組が映し出され、タレントや芸人が騒いでいる。こうした番組を見るのはずいぶん久しぶりのことだった。睦月がテレビの画面を見るときは、ニュース番組か映画作品のどちらかだ。

最後にバラエティ番組を見たのはいつだったか。一般人だったころのような気がするが、十年も前のことなど曖昧になっている。二十年ほど経過してしまったような錯覚さえ感じる。それくらい、人を殺す生活が身になじんでいた。

「できましたよー」

気がつけばバラエティ番組はクイズ番組にかわっていた。ひよりが鍋をテーブルの上に置き、食器を並べる。あつという間に食卓の完成だった。

「ごはんはこれくらいでよかったですか？」

「ああ」

炊き立ての白米が茶碗に盛られ、手渡される。鍋をはさんだ向こうで、ひよりがにつこりと微笑んだ。

「おかわりありますから、いっぱい食べてくださいね」

夕食時に、ときおりだがカクテルを飲むのだとひよりは言った。彼女の手元のグラスには、スーパーマーケットで購入した例のカクテルが注がれている。

「わたし、お酒ならなんでも大好きなんです。でも、カクテルがいちばん好きです。甘くて飲みやすくして」

「……意外だな」

「ふふ、よく言われます。カクテルは、いいことがあった日の晩だけ、飲むんですよ。ただ飲みたいだけの日は、日本酒とかで」

「今日はいいことがあったのか」

「睦月さんにまた会えました」

屈託なく言い放つその様は、友達との再会を喜ぶ子どもそのものだった。睦月もまたカクテルを飲みながら、そうかと相づちを打つ。

「睦月さん、あんまり変わってないから、すぐわかりましたよ」

「そうか」

「わたしはどうですか？ けっこう大人になったと思うんですけど、興味津々に尋ねてくるひよりに、記憶の中の彼女を重ねてみる。

雰囲気や性格に大差はないが、しかしやはり違うと感ずるのは、彼女がどこことなく落ち着いているからだろうか。うつすらと化粧も施され、動作にも昔のようなそそっかしさはなくなっている。

「……そうだな。大人になった」

「わあ、嬉しいな。そうなんです、大人になったんです。だから睦月さん」

視線をあげる。ひよりと目が合う。ことんと音がした。彼女はグラスをテーブルに置いて、さらに両手を膝の上に置いた。その表情は、相変わらず楽しげな笑みを浮かべている。

「いたずらを企んでいる子どもようだな、と思った。」

「わたしと結婚してください」

だからそれも、何かの計画なのだろうと、思ってしまった。

再びことんと音が響く。睦月がテーブルにグラスを置いたからだ。酒は頭にまでは回っていない。大丈夫だ、と自分自身を確認する。

「……一般人じゃなかったか」

「一般人ですよ」

何らかの計画の一端ではない、のだろうか。たとえば、式の壊滅を企てる同業者の手先であるとか。

「正気で言っているのであれば、俺はおまえの頭を疑う」

「じゃあ疑ってください。本気ですし正気です。それと、ちゃんとひよりって呼んでほしいです」

遠慮なく疑うことにする。暗殺を生業としている睦月に、大して親しくもない男に、本名さえ知らない相手に、数年ぶりに再会して結婚を申し込むなど　やはり、正気の沙汰ではない。

「金目当てか」

「違いますよ。わたしだって、現役だったころの貯金がまだたくさんありますからね」

「結婚を焦っているのか」

「やだなあ、睦月さん。わたし、こう見えて結婚してくれって言われたこと、あるんですから」

それには納得できた。ひよりの外見はともすれば女子高生に見えるほど若く、かわいげがある。こうして料理もできるようだし、何よりそこにいるだけで場の空気が明るくなる存在感は、人を惹きつけるものがあるだろう。

「……他に、理由が浮かばない」

「まだあるじゃないですか。いちばん、大切な理由が」

「大切な理由？」

「好きだからですよ。睦月さんのことが」

空耳だろうかと本気で考えた。

「四年前から、ずっと好きだったんですよ」

空耳ではなかった。ひよりは、はっきりとそう口にした。テレビからクイズの問題が聞こえてくる。睦月は手を伸ばすと、グラスをつかんでカクテルを一口飲んだ。

「……好かれる理由が見つからない」

思ったよりも途方に暮れた声が出た。ひよりが小さく笑う。

「最初はただ、かつこいいい人だなあって。でも一緒にお仕事してから、本当にすてきなあって思ったんです」

「特に会話を交わした覚えはないが……」

二度の仕事とも、せいぜい打ち合わせをしたことと、極月への報告に共に行ったくらいだ。やはり、心当たりがない。

「覚えてませんか？ 初めて一緒にお仕事したときのこと。標的が護衛つけてて、そのうちのひとりが、廃ビルから狙いを定めていたわたしに気づいたじゃないですか。それで撃たれそうになったとき、睦月さんが」

ひよりの言葉に、遠い記憶が蘇る。初めて彼女と組んだ仕事のことだ。睦月が三人いる護衛を引きつけ、標的が単身になったところを葉月がしとめる、そういう手はずになっていた。

チャンスは標的である製薬会社の会長が本社を出る瞬間だった。裏口から出、待機させている車に乗り込むところを襲撃する手はずとなっていた。睦月と葉月の二人は、製薬会社本社裏の半径十メートル以内にある廃ビルに身を潜めていた。

「後を頼む」

「はい」

鼻と口を覆うマスク、目深に被ったフードをピンで固定しできる

限り顔を隠すと、支給された手袋をはめ、睦月は廃ビルを後にする。睦月が裏通りへ出ると同時、会長である初老の男も、三人の護衛を引き連れ本社から出てきた。早足で近づくと、睦月に気づいた一人目が警戒するより早く、その胸にナイフを突き立てる。刃先がしつかりと心臓に喰い込む感触に、手ごたえを感じる。

ナイフの柄から手を離すと、呆然としているその体を蹴る。ずさ、と音がして、一人目はアスファルトの上に転がった。

二人目が、威嚇の声と共に発砲してくる。地を蹴って銃弾を避けざま、左袖に仕込んでおいたナイフを投げる。それは二人目の喉に突き刺さり、奇妙な悲鳴を響かせた。

三人目へと視線を移せば、初老の男をかばいながらも車へと乗り込むところだった。太股に下げておいた大型のナイフを放つ。それは車の左後輪をパンクさせた。同時に破裂音が二度響く。右後輪もまたパンクしていた。おそらく葉月が撃つたのだろう。彼女は複数のライフル銃を用意していた。破裂音が二度聞こえたところを考えると、前輪のいずれかもパンクしているに違いない。これで車両は使いものになるまい。

乗車しようとしていた三人目が動く。車内から身をひるがえした男の手には、ライフル銃があった。車内にあつたというのか。頭の中にあたりの障害物を思い浮かべる。どこへ身を隠すべきか。だが三人目は、それを睦月ではなく上空へと向けた。そう、葉月がいる、廃ビルだ。

右足を踏み込む。男の構えるライフルの銃口が、葉月のいるだろう箇所に狙いを定めて静止する。腰のホルダーからナイフを取り出す。男の指先が、引き金にかかる。手の中でナイフを回転させ、しつかりと手に持つ。引き金にかけられていた男の指先が、ぐっと動く。狙いを定めることなく体の感覚だけを頼りにナイフを振るつたのは、後にも先にもこのときだけだった。

乾いた発砲音が空を裂く瞬間、ナイフの刃が男の首を裂いた。反射的に返り血を避ける。三人目はそのまま車体にぶつかり、崩れ落

ちた。ドアが開いたままの車内を確認する。標的である初老の男は、後部座席に腰掛けたまま、こめかみから血を流して絶命していた。車の後部座席のガラスには、丸い穴と亀裂があった。

きびすを返すと、廃ビルを指す。フードを脱ぎマスクと手袋をポケットへ無造作に突っ込み、駆けた。

廃ビルの階段を駆け上る。葉月がいたはずの五階に到着する。窓辺を見れば、果たして無事だった。膝をついてライフル銃をケースへとしまい、睦月に気づいたのか顔を上げる。

「ありがとうございます、助かりました」

立ち上がり、ぺこりと頭を下げた後、につこりと微笑む。今しがた人を殺したとは思えない笑顔だった。

s c e n e : 1 「 4 」

「守ってもらったんだなあって思ったら、なんだか嬉しくって。人に攻撃することはあっても、守られることなんてない職業でしたから」

「仕事をしただけだ」

「それでも嬉しかったんです。それから、睦月さんのこと目で追いかけるようになって……もっとたくさん一緒にお仕事できたらなって思ってたんですけど、現実はその甘くなかったです」

ひよりは肩を落としたかと思うと、「でも」と言葉を続けた。

「こうしてまた会えて、このまえからずっと舞い上がってるんです。睦月さん、わたしの家に来てくれるし、もう今が最後のチャンスかなって思ったら……つい、プロポーズしてしまいました」

それは“つい”でしてしまうことなのだろうか。女の思考は理解できない。睦月が考え込んでいると、ひよりはひらひらと手を振った。

「あ、返事は今すぐになんて言いませんから。睦月さんの答えが決まってるなら、今すぐでもかまいませんけど……そうじゃないなら、決まったときに、教えに来てもらってもいいですか？」

「必要であれば電話番号でも教えておくが」

ただし、睦月は仕事用に支給された携帯電話しか所持していない。だがひよりは首を横に振った。

「直接、聞きたいんです。迷惑ですか？」

「いや、構わない」

「よかった。じゃあ、わがままですけど、お願いします」

座ったまま頭を下げる彼女につられて、睦月も頭を下げた。ひよりが肩を震わせて笑う。

「そういう礼儀正しいところ、好きです」

明るい笑顔の告白は、幼い子どもが周囲の大人に伝えるそれによ

く似ていた。

食事を終え、出されたワインに口をつけながら、そう離れていないキッチンで食器の片づけられる音を聞く。片づけを申し出たが、「睦月さんはお客さまですから、ゆっくりしててください」と断られた。ひとまず視線を向けているテレビ番組は、いつの間にか夜のニュースに変わっていた。それを見るでもなく、先ほどのひよりの申し出について思案する。

結婚というものがどのようなものであるかは、把握している。だが経験したこともないそれが、実際にどのようなものなのかは、わからない。妻子持ちである同僚の長月は「家庭はいいものですよ」とこぼしていたが、どのようにいいものであるのか想像つかない。

睦月には、両親の記憶がない。兄弟もなく祖父母もおらず、親戚の家をたらい回しにされ育った彼には、家庭がいいものであるという思考が理解できない。悪いものだとは思わないが、だからといっていいものだと思うにはそれだけの要素が不足していた。

ひよりと結婚し、夫婦になったところを想像してみる。夫婦というからには、共に暮らさねばならないだろう。それよりもまず、彼女の親類に挨拶をしなければならぬはずだ。

いや 何より、時間があれば書店や映画館に入り浸っていることは、平素と変わらずできるのだろうか。読書と映画鑑賞にばかり熱を上げる睦月にとって、それこそ最も重視する点だった。

「片づけ終わりました」

エプロンを外し、ひよりがイスに腰掛ける。置いてあったグラス

へワインを注ぎ差し出せば、彼女は顔をほころばせた。

会話はなかった。それでも気詰まりを感じることはなかった。静かだが、穏やかな夜だった。

「結婚」

「はい」

「するか」

「へ」

ひよりがきよとんとして動きを止める。睦月はなおも続けた。

「ただし、俺は暇さえあれば読書か映画に没頭している。あまり構ってやることは」

「します！」

言い終わるより早く、ひよりが勢いよく返事をした。考えた上での返答なのだろうかと疑わしくなる。思わず怪訝な視線を投げかけたが、ひよりはなおも言い募った。

「睦月さんと結婚したいです！」

「……もう少し考えたほうがいいんじゃないか」

「いいえ、大丈夫です。だってわたし、睦月さんが人を人としてしか認識できないってわかってますから。特別になれなくても、女として意識してもらえなくても、結婚してもらえるならそれだけで十分です」

熱のこもった口調ではあるが、言っていることは悲惨だった。最も事実なので、睦月には否定も慰めもできないが。

「俺が言うのも何だが……いきなり結婚でよかったのか。こういうことには、順序があるんじゃないのか？」

「わたし、結婚するなら睦月さんみたいな人がいいなってずっと思ってたんで、いきなり結婚でいいんです」

「……そうか」

きっぱりと言い切られては、これ以上確認などできなかった。

「近いうちに婚姻届けを出すか」

「はいっ」

ひよりがはにかみながら、輝く瞳を睦月へ向けた。

「睦月さん。わたしは、これからなんて名字になるんですか？」

「神崎だ」

「神崎さん。わたしは、これからあなたのこと、なんて呼べばいいですか？」

「創真と」

「そうま……さん」

本名を口にするのも誰かに呼ばれるのも久しいことだった。不慣れなその響きに違和感を覚えながらも、うなづく。

「これから、よろしくお願いします」

「こちらこそ」

こうして二人はひとまず夫婦になった。

これは、普通ではない二人の、ごく普通の夫婦生活の物語である。

scene:2 「1」

睦月 いや、プライベートでは神崎創真である彼は、リビングを見回した後、相変わらずの無表情のまま頭をかいた。無機質だったはずの室内は、これでもかというほどの段ボールで溢れかえっていたのだ。

ひよりのプロポーズを承諾してから三日後、創真の家に荷物が届いた。三日前に交わした、ひよりの家での会話を思い出す。

「一緒に暮らすおうちですけど、どうしましょうか」

「ああ……そういえば、引っ越すと言っていたな」

「はい。創真さんと一緒に暮らすなら、二人で暮らせる広さのおうちがいいですよね」

「うちに来るか」

創真の家は駅のすぐそばのマンションである。寝室とシアタールーム、それに書斎の三部屋は埋まっているが、残る二部屋は依然として空いたままだ。二人で生活していくには十分な広さだろう。

「わあ、いいんですか。あ、そういえば創真さんってどこに住んでるんです？」

「駅前のマンションだ」

「も……もしかして、他の建物に比べて頭ひとつ突き出てる、あのマンションですか？」

「ああ」

「あんなセレブなおうちに住んでるんですか！」

ひよりが目を輝かせ詰め寄ってくる。セレブという意味はわからなかったが、うなずいた。

「入り口はもちろん階ごともオートロックがついてるですよね！ 鍵でロック解除しないとエレベーターを出ても各部屋に続くフロアに入れないですよね！」

「……やけに詳しいな」

「だってわたし、最初あそこに住もうかと思ったんですもん。お部屋の中まで見せてもらったんですよ。でも、これから一般人だから、分相応のところについて思い直したんです」

「憧れだったのだとひよりが笑う。読書と映画鑑賞さえできれば部屋などどこでも構わない創真にとって、彼女の反応は不思議なものだった。だが喜んでもらえたのなら、それでいいのだろう。」

「あの家で構わないのなら、荷物を送ってくれ」

「もちろんです！　じゃあ、住所を教えてください。そこに必要なものぜんぶ送りますね。あ、けっこういっぱいありますけど、大丈夫ですか？」

ひよりは一度席を立つと、メモ用紙とボールペンを持って戻ってきた。ボールペンにはひよこのマスコットがぶら下がっていて、メモ用紙に一文字書きたびに揺れた。住所を記しながら答える。

「部屋は二つ空いている。どちらも自由に使ってもらって構わない」「一つでいいですよ。それと、キッチンを自由に使わせてもらえたら」

「もちろん」

住所に加えて念のため氏名も書き終え、メモ用紙とボールペンをひよりに渡す。ひよりはそれを受け取ると、まじまじとメモ用紙を見つめた。

「創真さん……」

「なんだ」

「あ、いえ。創真さんって、創造の“創”に、真実の“真”なんです。それに、こういう風に文字を書くんだなあって。手書きの字、初めて見ました」

「……文字を書くのは、苦手だ」

「男の人にしては読みやすい字だと思いますよ」

「褒められたのか慰められたのか判断つかないが、うなずいておいた。そんなやりとりを交わしたのが、三日前だ。」

そして今日、ひよりから荷物が届けられた。「いっぱいある」と

言っていたとおり、「いっぱい」だった。見えていたはずの床は、今ではすっかり段ボールで埋め尽くされている。ひよりは一部屋でいいと言っていたが、このすべてが部屋ひとつに収まるとはとうてい思えない。勝手に荷ほどきするのもためらわれ、リビングは彼女が越してくるまで段ボールで溢れ返ることとなった。

ひよりが創真の家で生活できるようになったのは、それから一週間後のことだった。

「こんにちは、創真さん」

マンションの鍵はまだ渡していなかった。そのためマンションの出入り口で待ち合わせをし、共に部屋へ向かうこととなっていた。待ち合わせ時間の五分前に、彼女はやってきた。

「この際だし、いらぬもの捨てちゃおうと思って片づけてたら、時間がかっちゃいました」

ポストンバッグを抱えてひよりが苦笑する。

「荷物を」

「え、あ……ありがとうございます」

やけに重そうなバッグを受け取れば、それは大した重さではなかった。ひよりが抱えていたときよりも小さく見える。それだけ彼女が小柄だということなのだろう。

「七階の七〇三だ」

オートロックの玄関を抜け、ホールでエレベーターの到着を待ちながら自室を伝える。ひよりは「はい」とうなずいた。そんな彼女に、ポケットから取り出した鍵を手渡す。

「七階についたらロックを外してみるといい」

「あ、はい。わたし、オートロックのおうち、住んだことないんです。今のうちに練習しておきます」

音を立てて到着したエレベーターへと乗り込み、七階のボタンを押す。

「その鍵はおまえのものだ」

「もらってもいいんですか？」

「自宅の鍵を持っているのが普通だろう」

「そうですね。そっか……わたし、創真さんと一緒のおうちで、暮らすんですね……」

手の中の鍵を見つめながら、ひよりがしみじみとつぶやいた。が、すぐに勢いよく創真を見上げた。

「創真さん！」

「ああ」

「わたしの名前は、ひよりです」

知っている、とうなずこうとして、動きが止まる。わずかに思案したのち、口を開いた。

「……その鍵は、ひよりのものだ」

「はいっ！」

名前で呼んでくれと言われたことを思い出し訂正すれば、元気な返事があった。

エレベーターが七階に到着し、外へ出る。各部屋へ続くフロアへ立ち入るには、自動ドアの鍵穴側にあるセンサーに鍵を近づけ、ロックを解除しなければならぬ。さっそくひよりが鍵を手にドアへと近づく。かしゃりと解除される音がして、自動ドアがスライドした。

「わあ……！　すごいですね！」

「外へ出る際には勝手に開く。鍵を持たずに出かけることがないよう気をつけておくことだ」

「はい」

フロアを進み、目的の七〇三号室へとたどりつく。部屋の鍵はオートロックではないが、一応ひよりに開けさせた。二人が入ってもまだ余裕をみせる広さの玄関で、靴を脱ぐと上がり込む。

「……どうした？」

振り返る。ひよりはなぜか、上がり込んだ玄関先に三つ指をつき正座していた。

「創真さん」

「ああ」

「ふつつか者ですが、よろしく願います」

ゆっくり、はっきりとそう告げて、ひよりが頭を下げる。創真は目を見張った。小柄なひよりがそうするといっそう小さく見えるが、同時に、彼女がとてつもなく大きな存在に思えたのだ。

彼女の前へ戻ると、荷物を置いて膝をつく。ゆっくりと顔をあげたひよりの手を取った。何と言えはいいのだろう。悩んだが、女性を喜ばせるための言葉など創真に浮かぶはずもなかった。

「こちらこそ、よろしく頼む」

「はいっ」

結局そうして無難な返事となったが、それでもひよりはうれしげに笑んで、創真の手をきゅっと握り返してきた。

それからまず行ったことといえば、荷ほどきだった。ダイニングキッチンでもありリビングでもある広い部屋に置いていた段ボールの中から、七箱はキッチン台のすぐ側へ運ぶように指示された。ひよりはそれらのテープを創真から拝借したカッターナイフで切断し、すべての箱を開封する。見えた中身に、創真は絶句した。

「これ、ぜんぶキッチン用品なんです。わたし、料理やお菓子づくりが大好きで……気づいたら、たくさん道具が増えちゃってました」

七箱すべてに、鍋やフライパン、そのほか見慣れぬ台所用品らしきものが詰め込まれてあった。これほどの道具を使って作る料理や菓子とは、いったいどのようなものであるうか。食事は最低限で済ませていた創真に、予想できるはずもない。

「あの……えっと、やっぱり……多すぎますか？」

よくわからない道具を抱えたまま、ひよりがおずおずとうかがってくる。創真は殺風景なキッチンを見、それから段ボール箱を見、最後にひよりの見た。

「……台所は、ひよりに任せる」

「えへへ……ありがとうございますっ」

数日後、カラフルでファンシーなキッチンが出来上がることなど、

このときの創真に想像できるはずもなかった。

「こつちのお部屋はなんですか？」

キッチンの荷ほどきは後回しにしたらしいひよりが、荷物の向こう、ダイニングキッチンからすぐ側のドアを指さす。先ほど通った廊下へ通じるドアとは違い、スライド式のそのドアの向こうには、やや小さめの和室があった。

「和室だ。書斎にしている」

ドアをスライドさせて本の溢れる中を見せてやれば、ひよりは目を輝かせた。

「わあ、本がいっぱいあつてすてきですね。わたし、和室大好きです」

「ここにするか？」

「えっと……わたしのお部屋を、ということですか？」

「ああ。もしそうするなら、本を片付けるが」

「うーん……家の中の間取りを把握してから決めます」

そう答えたひよりに、創真は家の中をすべて案内することにした。玄関を入ってすぐ右側にはドアがあり、そこを自室にしている。だがベッドと本以外さして物はなく、せいぜいクローゼットの中に最低限の衣類があるだけだ。生活間のないその部屋を、ひよりは「引越したてみたい」と評した。

創真の自室の隣に角部屋があり、そこは空いていた。家の中で最も広い部屋であり、ウォークインクローゼットやバルコニーも備え付けられている。

廊下の角を曲がり先へ進めば、右側にまた部屋があった。そこをシアタールームとし、壁にずらりと並んだ棚にはDVDやブルーレイディスクが収納されている。大きなモニターの前、ローテーブルとソファを設置しており、映画鑑賞しながら飲食はもちろん眠ることもできる。今では自室よりも寝起きする頻度の高い部屋だ。

棚の中をしげしげと眺めていたひよりは、一本の映画に声をあげた。

「あ、ローマの休日！ わたし、この映画大好きです」

「観たいときは自由に使うといい」

「いいんですか？」

「ああ」

うなずけば、彼女は「おうちに小さな映画館があるなんて夢みたいです」と、うっとり頬を染めた。

その部屋と廊下をはさんだ場所にトイレがあり、その部屋の先には洗面室と浴室があった。そこを通り抜ければ、ダイニングキッチンへ出る。

「以上だ」

「ありがとうございました」

「おまえの……ひよりの部屋は、どこがいい」

「あの……その、お部屋のことなんですけど……」

ひよりは、彼女にしては珍しく言いよんだ。続きを待ってみても、口を開いたり閉ざしたりするばかりだ。

「……何か、問題があったか」

「あ、いえ！ 問題じゃなくて、えっと……わたしの、部屋なんですけど……」

「ああ」

「い、一緒じゃ……だめですか？」

「一緒？」

意味がわからず首を傾げれば、ようやく意を決したらしいひよりが「創真さん！」と声を張り上げた。

「一緒のお部屋で寝起きしたいです。そ、その、ベッドも……ひとつで、できれば、一緒に……あのっ……」

最初の勢いはどこへやら、言葉が続けるうち、健康な肌色はみるみるうちに朱色へ染まり、声もしぼんでいった。それでも目をそらすまいと見上げてくる様子には、妙な必死さがあった。

「ふ、夫婦、ですし……一緒じゃ、だめですか……？」

ひよりが胸元で両手を握る。創真は彼女の言葉を脳内で繰り返す

と、うなずいた。

「わかった」

「えっ？」

「寝室を、共同にするのか」

「え、あ……はい」

「それならあの広い部屋がいいだろう。ベッドは今のところシングルしかない。二人でも眠れる広さのものを、後日探してみよう」

そう話しかけてみても、ひよりはきょとんとしたまま固まっていた。

「……ひより？」

「あっ……は、はい！」

「それで、いいだろうか」

「はい！ もちろんですっ」

こくこくとうなずいた彼女に、ほつと息をつく。意味をはき違えてしまったかと危惧したが、そうではなかったようだ。

「なら、今日からあの部屋が俺たちの部屋だ。荷物を運んでおく」

「はい……お願いします」

ひよりが微笑んでうなづく。しかしその笑顔には普段の明るさはなく、どこか影って見えた。だが当人が何も言わないのだから問題はないだろうと思い、特に追求することはなかった。

s c e n e : 2 「 2 」

ひよりは現在、駅付近の花屋で働いている。引っ越しのため、今日と明日は特別に休みをもらったらしい。家の中はまだ片づいていないため、外食をした先の洋食店で、彼女はそう話してくれた。

「だから、明日に残りの荷物を片づけますね。あ、お部屋の内装なんですけど……」

「好きにしてくれて構わない」

創真は、内装に凝ったり家具にこだわったりするような性質ではない。彼にとつて家は寝食のための場所であり、それ以上でもそれ以下でもなかった。

「……どうした？」

フォークを止めて黙り込んだひよりに問いかける。顔をあげたひよりは、困惑しているような寂しがつているような、複雑な表情をしていた。

「創真さんは、なんでも好きにしていって言ってくれますけど……」

…申し訳ないです。わたしばかり、好き勝手にして」

「なぜそう思う」

「だって、元は創真さんのおうちじゃないですか。それに、人それぞれ好みがありますし……わたしが勝手に内装を変えて、それで創真さんが居心地悪くなったりしたらどうしようって……」

「安全に眠れる場所であれば、構わない。それだけだ」

「そう、ですか……」

あくまで本心だが、それでもひよりの表情が晴れることはなかった。どこかしゅんとした様子で食事を続ける彼女を眺めながら、どうにか言葉を探す。しかしやはり、見つからない。他者と深く関わることなく生きてきたつけが、今こうして回ってきているようだった。

「……俺には、こだわりのない。他人に比べれば、の話だが。だから」

ら、内装や家そのものに関して、正直に言えばどうでもいい」

「はい……」

「それで……ひよりが、こうしたいと思い描く理想があるのなら、そうすればいい。問題があれば言う」

「わかりました」

うなずいた彼女は、ようやく微笑みを浮かべた。しかしそれは、家で見せた、明るさのない微笑みだった。

その夜から、同じ寝室で寝ることとなった。ひよりがそうしたいと主張したためだ。ベッドにあった敷き布団や毛布を部屋に運び込み、ひとまず今晚だけそれで眠る。明日にでもベッドを購入しに行く予定だった。

「わたし、先にお休みさせてもらいますね」

シアタールームのソファで読書をしていた創真に、入浴を終えて出てきたひよりが声をかける。創真は本から視線をあげると、うなずいた。

「ああ」

「それじゃあ……おやすみなさい、創真さん」

「おやすみ」

こうして挨拶を交わす相手がいるというのは、なかなか新鮮だった。そして今夜から隣で誰かが眠っているというのも、新鮮というよりは初めてのことだった。物心つくころからひとりで眠っていた創真には、むしろ人の気配で眠れないのではないかと心配さえあるほどだった。

半分まで本を読み進めたところで、棊を挟むとテーブルに置く。眠りにつくべく寝室へ向かえば、部屋の片隅に敷かれた布団の中、ひよりが規則正しく呼吸を繰り返していた。創真が来るためだろう、左側に体を寄せて、外側に顔を向けて眠っているが、今にも布団から飛び出してしまいそうだった。

これが夏であったならよかったのだが、あいにく今は冬だ。夜更けや朝方は冷え込む。華奢なひよりなど、すぐに風邪をひいてしまっただろう。掛け布団や毛布をしっかりとその肩にかけてやると、創真もまた布団へ入り込む。シングルであるためか、いくらひよりが小柄で創真が平均より細いとはいえ、やはり窮屈だった。

ひよりに背を向けて横になっていたが、やがて背中にくもりを感じた。やわらかな、手だろうそれが背に触れる。

「……創真さん」

「起きていたのか」

少しばかり上体を起こすと、ひよりを振り返る。彼女は、じっと創真を見つめていた。

「ずっと……眠れなくて」

「無理もない。慣れない場所だ」

「応えながら、体ごと彼女のほうへ向きなおる。」

「違うんです。場所は、どこでだって平気なんです。すぐく、どきどきして……」

「緊張しているのか」

ひよりがうなずく。その小さな手が動いて、創真の左手を取った。何かと尋ねる間もなく、自分の胸に押し当てる。これには創真もぎよっとしたが、その動揺が表に出ることはなかった。

「創真さんが……近くに、いるから……」

強い鼓動がてのひらを通じて伝わってくる。ばくばくと鳴るそれは、いつか破裂してしまうのではないかと心配になるほどだった。

「嬉しくて……でも、恥ずかしくて……」

ささやく声は震えている。創真の手をつかんだままのその両手も、

震えていた。

「こんなにごきごきしてるんです。だけど……創真さんは、違うんですよね。創真さんにとっては……ただ、他人と一緒に寝てるって……それだけ、で……」

「ごめんなさいと、か細い謝罪が聞こえる。ひよりは泣いていた。つかんでいた創真の手を胸に抱いて、小さな嗚咽をこぼしていた。

「創真さんの、お嫁さんにしてもらえただけで、いいって……ほんとに、ほんとにそう、思ってたんです……なのに……」

抱かれたままの手に、熱い吐息がかかる。やがてひよりは創真の手を解放すると、パジャマの袖で頬をぬぐった。

「ご、ごめんなさい……やだな、恥ずかしい。わ、忘れてくださいね。おやすみなさい」

そっぽ向こうとするその肩をつかんだ。ひよりの体が震える。おずおずと見つめてくる様子に、創真は小さく息をついた。

「遠慮をして、どうする」
「えっ……」

「まだ、婚姻届けは出していないが……夫婦だろう。夫婦間で遠慮をするのは、変だと思うが」

「だ、だって……夫婦って言っても、久しぶりに会ったばかりで……わたしは創真さんが好きだから、どんなことも嬉しいですけど、創真さんは……」

半泣きのまま、ひよりが言う。その先を聞きたくないと思った。なぜそう思ったのかは、わからない。

「むぎゅっ」
ひよりの肩をそのまま抱き寄せ、その小柄な体を自身の胸に押しつける。

「そ、創真さん……」

「寒くないか」

「え、あ、いえ……あったかい、です」

「そうか」

幼子をあやすよう背を優しくたたいてやれば、ひよりはその身をすり寄せてくる。ぐす、と鼻を鳴らすそれに、ちくりとどこかが痛んだ。

「……嫌なことは、嫌だという。嫌いであれば、結婚しようと思わない」

たたいていた手で、背を撫でる。

「そう……です、よね……創真さん、なんでも、誰にでも、いいよって言うてくれるような感じがして……」

「そこまでこだわりがないわけでもない」

いくらなんでも、誰とでも結婚しようと思えるほど無節操でなければ非常識でもない。創真は創真なりにひよりを気に入っているのだが、ひよりがその事実を知るはずもなかった。

おとなしくなったひよりからは、規則正しい吐息が聞こえる。それに耳を傾けていると、瞼が重くなってきた。

「……創真さん」

「なんだ……まだ、あるのか」

言外に眠いと込めれば、ひよりが小さく笑った。子どもみたいだと言われた気がしたが、彼女がようやく笑ったので、気に留めないことにする。

「おやすみなさいのちゅーは、ないんですか？」

「……おやすみ」

期待に見つめてくるひよりの髪を指先ですき、額へ口づけを落とす。 「そこじゃないです……」と、拗ねたような声が聞こえた気がしたが、眠りの底へ意識を手放した。

だから、創真は知らない。

「創真さん……大好きです……」

甘さとやわらかさを含んだ声音で囁かれた告白も、ひよりが彼の唇に口付けたことも、寝顔を見つめるその眼差しのやさしさも。

何一つとして知ることもなく、共に過ごす初めての夜を、明かした。

scene : 2 「 3 」

創真の一日は、まだ空も暗いころに始まる。

午前四時、目覚まし時計がなくなると目を覚まし、布団から出る
用を足したのち洗面室へ向かい、顔を洗って動きやすい服装に着替
える。固形の栄養食品をろくに咀嚼もせず飲みくだしながら、仕事
用の携帯電話に連絡がないことを確認すると、それをポケットに押
し込み、歯磨きを終えて外へ出る。その際、履くのは普段の黒いブ
ーツではなく運動靴である。

それから外に出て準備運動を済ませ、ランニングする。毎朝決ま
ったコースを、決まったペースで走る。一時間ほどかかるが、時間
が余ればさらに走る。家へ戻る前に公園で丹念にストレッチを行い、
それからマンションへと帰る。そうすると、決まって帰宅時間は六
時となった。

オートロックの扉を抜け階段で七階へと上がる。もう一度オート
ロックを解除し七階のフロアへ入り、七〇三号室の鍵をあけてドア
ノブに手をかけたたん、ドアが勝手に開いた。ガン！と鈍い音が
して、額に衝撃が走る。

「あつ……ご、ごめんなさい！」

「……いや」

ひよりだった。出かけるのだろうかと思っただが、よくよく見れば
彼女はいまだ寝間着姿であり、化粧の施されていないその目元には
うっすらと涙がにじんでいる。

「痛かったですよね。創真さんが帰ってきたと思って、慌てちゃっ
て……」

「平気だ。それよりなにかあったのか」

「もう！ びっくりしたんですよ、朝起きたら創真さん、いなくな
ってるんですもん！」

「ああ……すまない」

つい日頃のままに行動してしまったが、昨日から一人暮らしではなくなったのだった。となれば、やはり出かける際には一言告げるのが礼儀というものだろう。そのくらいの常識は、創真にも備わっている。

「悪かった」

「もう……不安になるじゃないですか……」

「不安？」

ひよりは昨晚のように涙を袖でぬぐうと、目を伏せた。

「だって、昨日、わがままばかり言ってしまった……いやになっただかと……」

「遠慮するなと言っただろう」

小さな背を押して室内へ入らせると、創真も靴を脱いで部屋に上がった。寝室のクローゼットから衣類を取り出すと、浴室に続く洗面室へ向かう。その背へとひよりが問いかける。

「創真さん、どこに行ってたんですか？」

「ランニングだ。習慣になっている」

上を脱いで洗濯機へ突っ込めば、ちょうど顔をのぞかせたひよりが「わあ」と驚嘆なのか感嘆なのか判断しかねる声をあげた。

「……どうした」

「……」

「このまま服を脱いでいてもいいか」

創真としては、早くシャワーを浴びてさっぱりしたいところなのだが、ひよりがぼんやりとこちらを見つめたまま動かない。いくら夫婦とはいえ、先日まで他人だった相手の前で裸になってもいいのだろうかと思む。

「あ、ごめんなさい。きれいな体だなあとあって、見とれてしまいました」

ひよりは恥ずかしげに頭を下げると、ドアを閉じて去って行った。創真は首を傾げる。浴室内の鏡で自身の体を確認する。右わき腹に走る直径十センチほどの傷跡が、醜くその存在を主張しているだ

けだった。

「携帯電話を買いに行きましょう」

テーブルの上に朝食を並べながら、ひよりが言った。シャワーを終えた創真は、タオルを頭にかけてまま、無言でポケットを探った。手にしたそれを差し出してみせる。

「お仕事用のじゃないですよ、プライベート用のです」

創真が取り出した仕事用のそれに、ひよりが頬を膨らませる。創真は仕事用のそれを再びポケットへしまうと、タオルで髪を拭いながら言った。

「今まではこれだけで問題なかったが」

「それは創真さんがお仕事に夢中だったからです。これからは、旦那さんとしての役目も果たしてもらいますから……そのためには携帯電話が必要不可欠なんです」

「わかった」

とうなずいたものの、実際にはどこがどう必要不可欠なのか理解できてはいなかった。だがひよりが言うのならばそうなのだろうと納得する。

「わたしが電話したらちゃんとしてくださいね。出られなかったらあとからかけ直して、メールだってお返事くれなきゃだめですよ。

あ、わたし以外の女の人のアドレスや番号を登録しちゃだめですからね！」

「……それは、旦那の役目なのか」

「そうです」

につこりと微笑んで、しっかりとうなずいたひよりには、肯定以外を許さない妙な迫力があつた。

「わかつた」

世の中の「旦那さん」というのは大変なのだな　そんな勘違いをしながら、創真もまたしつかりとうなずいた。

「じゃあ、朝ごはんにしましょう。とりあえずトーストにしたんですけど、和食がよかつたですか？」

「いや、どちらでも構わない」

「じゃあわたしの気分で決めますね」

トーストを中心としたバランスの取れた朝食には、見慣れぬ食器が使われていた。そういえば、創真の家にはひとりぶんの、それも最低限の食器しかない。持ってきた食器をさっそく使っているのだらう。トーストの受け皿やサラダの容器には同じ熊のマスコットキヤラクターが描かれており、そういえば以前ひよりの部屋にあがつた際、そのぬいぐるみがあつたことを思い出した。おそらくこのキヤラクターを気に入っているのだらう。

「今日はベッドを買いに行くって言っていましたよね」

「そのまえに、行く場所がある」

「どこですか？」

サラダを頬張りながらひよりが問う。すでに食べ終えていた創真は、断りを入れて席を離れると、目当てのものを手に戻った。差し出したそれに、ひよりが目を丸くする。

「あとは、ひよりのサインだけだ」

「婚姻届……」

「保証人は極月と長月に頼んだが、まずかつただらうか」

「いえ！　むしろ、極月さんと長月さんになっていただけで、嬉しいくらいです」

ひよりが荷造りをしているあいだ役所に行つて婚姻届を受け取り、長い付き合ひである上司と、信用のおける同僚に頼んでサインをもらつておいたのだ。

極月の驚く様を目の当たりにし、妻子持ちである長月からは役立つ情報をもらうことができたのを思い出す。

「これを提出したら、本当に夫婦なんですよね……」

ひよりは受け取ったそれをしげしげと眺め、微笑んだ。無邪気なそれではなく、どこか感慨深いものを含んだその表情は、彼女が少女ではなくひとりの女性なのだと改めて認識させられるものがあった。

「先に、それを提出しに行こうと思う」

「はいっ。一緒に行きましょう」

ひよりは片づけを終えたあと、それにサインをした。初めて見る彼女の字は、女性らしく丸みを帯びた、きれいな字をしていた。

scene : 2 「 4 」

「創真さん」

ダイニングキッチンで本を読んでいた創真は、ひよりの声に顔をあげた。ひよりは出かける支度をすると行って、かれこれ三十分ほど寝室にこもっていたのだ。

「あ、あの……この服、どうですか……？」

小花柄のワンピースに身を包んだひよりは、もじもじと創真を見上げる。彼女の乙女心など知らず、創真はうなずいた。

「一般人に見える」

「もう、そういう意味じゃないですよ。似合いますか？」

「ああ……似合っている」

女子高生に見えると思ったが、それを伝えることはやめておいた。ひよりが上機嫌に「化粧してきます」ときびすを返したところを見ると、やはり口を閉ざして正解だったようだ。

それから二十分ほど経って、ひよりは再び現れた。相変わらずの薄化粧に加え、かわいらしいデザインのワンピースを身に包んでいると、十六かそこの少女にしか見えない。

自分が犯罪者に見えなければいいが、と、創真は本気で懸念した。

「お待たせしました、出発しましょう」

「ああ」

イスから立ち上がるとジャケットを羽織る。仕事用とは異なるデザインのもの、しかし同じ黒色のジャケットだ。マフラーを首周りに一周させながら、ひよりがじっとこちらを見ていることに気づいた。

「なんだ」

「かつこいいいなあって、思ったんです」

「……………」

「あれ、あんまり言われたことないですか？」

ひよりが靴を履きながら、創真を振り返る。創真は今朝の運動靴

が片づけられていることに気づきながら、首を振った。

「時折、言われる」

「ですよ。創真さん、元々かつこいいですもん。服装もシンプルなのにおしゃれに見えますし」

「……服は、臯月が選んだものだ」

ブーツに足を通す。先に外へ出たひよりに続いて創真もまた外へ出ると、鍵をかけた。

「臯月さんが？」

「いつだったか書店へ出かけた際、出くわしたんだが……」

臯月は古くからの式の一員であり、美人だが気の強い女で、見た目は二十代だが実際の年齢は不明である。女であることと毒を武器に仕事を行うため、そのターゲットはほとんどの場合が男に限られていた。

「俺の服装を見てさんざんのものしつたあと、見立ててやるから本を買ってくれと頼まれた。断ろうかと思っただが、嫌な予感がして諦めた覚えがある」

「臯月さん、強いですもんねえ……」

エレベーターへと乗り込みながら、ひよりが苦笑いする。

「極月が女は怖いと言っていたが、臯月を見てみると実感する」

「ふふ。創真さんも、そういうふうに思ったりするんですね。あ、もしかして、わたしのことも怖いって思いますか？」

「……いや、今のところ、特には」

「なんですか、その“将来的に怖いと思うかもしれない”って言い方」

ひよりが頬を膨らませる。すまないとわびれば、とたん彼女は「冗談ですよ」と破顔した。ころころと表情を変化させる彼女は、見ている飽きない。

マンションの外へ出れば、冷たい風が肌を刺す。通りを歩きながら、ひよりが小さな両手に息を吐きかけていた。

「手袋してくればよかったです」

「そんなに寒いかな」

「寒いですよ……あ、そうだ」

ひよりは創真の腕をくいと引く。何かと思って彼女をうかがえば、「手、出してください」と言われた。ポケットに突っ込んでいた手を差し出す。ぎゅっと、手を握られた。

「わあ、あつたかい」

ひよりの手は冷えていた。特に指先が冷たい。指摘すれば、「末端冷え性なんですよ」と答えがあった。

「手袋でも買っか」

「手袋」

ひよりが表情を明るくする。かと思うと、慌てたように首を横に振った。

「いらぬです」

「あつたほうが便利だろう。これからもつと寒くなる」

「だって……手があつたかくなつちやったら、創真さんに、こうして手をつないでもらえなくなるじゃないですか」

彼女の言い分に、創真は首を傾げる。

「手袋をしていようがしてまいが、つなぎたければつなげばいい」

「……じゃあ、これからお出かけするときは、かならず手をつないでくれますか？」

「ああ」

うなずけば、ひよりが「やったあ」と笑う。創真の気持ちも緩む。ひよりの笑顔には、見る者を和ませるものがあつた。

「まずは役所に行きますか？」

「……その前に、確認したいことがある」

「はい、なんでしょう」

「両親に挨拶をしなくていいの。世間一般では、まず両親の承諾を得てから婚姻届を出すのだろう」

早々に確認をしておけばよかったのだが、タイミングを逃していた。今更に問えば、ひよりが「大丈夫です」と答える。

「両親はいません。中学のころに事故で他界しましたから」

「……兄弟は」

「兄がひとり。でもその兄も、もういません。親戚だって、うちの両親は駆け落ちでそれぞれの家から勘当されていましたから、いないんです」

答えるひよりの表情に悲しみはなく、声にも淀みはない。暗殺を行っていた彼女には、例えどれだけ一般人らしくて純粹であろうとも、人の死に関して平然としていられる部分があった。

「創真さんの、ご家族は？」

「いない。気づいたときには親戚の家を転々としていたから、俺が幼いころにでも死んだんだろう。おそらく兄弟もいないはずだ」

物心つくころには親戚の家で生活していた。一度、家族のことを尋ねたが、父の弟であるらしいその人物は眉間に皺を寄せ黙り込んでしまった。その人の妻である女性は、はぐらかして答えてはくれなかった。それ以来、誰かに家族のことを問うのをやめた。だから創真は、自身の家族に関して正確なことを知っているわけではない。

「じゃあ、一緒ですね」

ひよりが微笑む。

「わたしもひとりだし、創真さんもひとり」

「そうだな」

「でもこれからは、わたしが側にいます。あつたかい家庭にしましようね」

つないだ手にぎゅっと力が込められる。ひよりの言うあつたかい家庭がどのようなものであるか想像できないが、創真はうなずいた。人殺しがまっとうな家庭など築くことができるのだろうか、そんな疑問が浮かんだが、口にははばかられた。

婚姻届を提出し、買い物を済ませ、昼過ぎには帰宅した。購入した寝具一式を自宅まで宅配してもらったため、家で待機することにしたのだ。シアタールームのソファに腰かけ、新しく購入した携帯電話の説明書をひととおり読む。読まずとも扱うことはできるだろうが、性分だった。

ひよりはといえば、キッチンで荷ほどきを行っている。料理が好きだという彼女は、台所にこだわりがあるらしく「ぜんぶわたしの好きなようにしますね」とはりきっていた。もちろん台所作業をしない創真に異論はない。

手の中の携帯電話には、ひよりの番号だけが登録されていた。ひよりと同じ会社のもので、機種も彼女が選んだ。プライベート用のものになるが、そもそもプライベートで付き合いのある人間などいない。おそらくこの携帯電話にひより以外の番号が登録されることはないだろう。

式から支給された携帯電話には、構成員すべての番号が登録されている。だがプライベートにおいてそれを使用することはない。構成員同士が連絡を取り合うのは同じ仕事に取りかかった際だけだ。

最も、皇月のようにプライベートで出くわし共に行動をすることもあれば、長月のように何らかの保証人を頼むこともある。

数日前、保証人を頼むために式の本部へ向かったことを思い出す。極月に電話をし、長月はいつ本部にいるかと問いかけた。

「彼にはちょっとややこしい仕事を頼んでいてね、三日前から出てる。明日になれば終わって報告に来てくれると思うが」

「時間は」

「たぶん、午後七時か八時」

「わかった」

翌日、極月が言う午後七時に本部へと向かった。こぎれいなオフ

イスの社長室へ直行すれば、ちょうど長月が扉の向こうへ消えて行くところだった。そのあとを追いかけて、極月と長月がいるだろう部屋へ踏みいる。

「以上で報告を終了とさせてもらいます。いかがでしょう、極月君」

「完璧です ああ、睦月」

極月の声に、黒塗りのデスクの前に立っていた、杖をついたスーツ姿の男が振り返る。壮年の男は、被っていた帽子を少し上げ、再び被るといふ洋風の挨拶をしてみた。

「お久しぶりです、睦月君」

「ああ」

睦月の父親よりも年上だろう男、長月は、実質この組織のトップである。極月が総括者ではあるが、元よりこの組織は長月こそ総括者になるはずだった。だが彼は辞退し、ただの構成員であることを選んだ。そのとき極月と彼の間でどのようなやり取りが行われたのか、彼らの心中がどのようなものであったのか、睦月は知らない。

「二人に頼みがある」

「へえ、君が頼みなんて珍しい」

「僕にできることであれば、どうぞ」

睦月は鞆の中からファイルを取り出すと、さらにその中から一枚の紙を取り出し、デスクの上に置いた。

「婚姻届？」

「保証人にサインを頼む」

「ええ、構いませんよ」

長月がゆったりとうなずき、スーツの内ポケットを探る。その手には印鑑があった。「少々、拝借します」と断りを入れると、デスクの上にあつたボールペンと朱肉を手に取り、達筆にサインをする。睦月に本名を知られることに抵抗はないようだった。

「……ちよっと待て創真。夫の欄におまえの氏名が記入されているのはどういふことだ」

極月としての表情はどこへやら、本来の口調で彼が問いかける。創真は見てのとおりだ、と答えた。

「結婚する」

「おまえが？ 誰と？」

「葉月の、呉原ひよりと」

「呉原さんと……いったい何があつてそうなつた。おまえ、何したんだ」

「まあまあ、極月君。睦月君も、もう子どもじゃないんですから」

長月にたしなめられ、極月は言い募ろうとした言葉をやめる。極月は、創真にとって兄のような存在だった。創真にナイフを教えたのも彼であり、この世界に引き込んだのも彼だ。

「確かにそうですが……創真、せめて説明くらいしてくれ。おまえがどう思つてなくても、俺はおまえを本当の弟のように思つてるんだ」

「それは俺も思つている。俺には兄はいないが、もしいたら真幸まゆきのようなだろうと」

「……そうか」

本名を呼ばれた極月は、創真の言葉を聞いて少しだけ顔をほころばせた。が、すぐに表情を硬くする。

「それで、どうして結婚なんてことになつたんだ」

「結婚してくれと言われて、了承した」

「呉原さんとは以前から連絡を取り合つていたのか？」

「数日前に再会した。そのとき食事に誘われて、その席で結婚することになつた」

「……ちよつと展開が早くないかな」

ようやく極月としての表情に戻つた彼は、イスの背もたれに寄りかかる。記名を終えた長月が、婚姻届とボールペンを極月へと手渡ししながら微笑んだ。

「若い人は情熱的ですから」

「いえ、そういう問題では……」

「僕も若い時分、今の妻に必死に求婚したものでした」

「長月さんが」

「ええ、若さ故の情熱でしょう、懐かしいものです。しかし相手が葉月君でよかった。彼女はいい子ですから」

「それは確かに。印鑑どこに置いたかな……あつたあつた。これだよし、と」

極月はサインを終えると、婚姻届を創真へ差し出す。創真はそれを再びファイルに挟み、鞆の中へしまつ。そんな創真へ、長月が語りかけた。

「いいですか、睦月君。結婚生活を長く平穩に続けるには、いくつかのコツがあります」

「コツ？」

「はい」

「ああ、俗に言う、忍耐と妥協ですか？」

「それも要素のうちです、極月君。ですがそれ以上に大切なのは、奥さんへの感謝の気持ちを忘れないことと、奥さんの言うことに逆らわないことです」

「感謝と服従か」

「睦月、その言い方はどうかと思うが……」

「奥さんが何かをしてくれたら、それにありがとうと伝えてください。家事もなかなかの重労働です」

「わかった」

「些細なことであれば、奥さんの言に従うように。男は、重要な局面でのみ決断すればいいのです」

重要な局面とは具体的にどのようなものであるか想像つかなかったが、これにも創真はうなずいた。

「用は済んだ。俺は帰る」

「ああ、気をつけて」

「ご相談があればいつでもどうぞ、睦月君」

極月と長月の言葉にうなずくと、創真は本部を後にした。

そして今日、婚姻届けを提出し、ひよりと正式な夫婦になった。実感はない。戸籍が変わったことと、同居人が増えたという感覚でしかない。

インターホンの鳴る音に、現実へと意識が戻る。ひよりが対応し、その数分後に改めてドアベルが鳴った。ちようど水を飲み部屋を出ていた創真は、キッチンを整えているひよりに「俺が出る」と伝えてドアを開けた。寝具一式を届けにきた、宅配業者だった。

そうして寝具一式は無事に運び込まれ、がらんとしていた寝室はようやくそれらしくなった。

「わあ！ 大きなベッドですね」

「ああ」

「これですつと一緒に寝られるんですね……」

「ああ」

ひよりはうつとりとした眼差しをベッドへ向けると、そこへ腰かけた。

「ふかふかですよ！」

はしゃいだ声をあげて、真新しいベッドの上に転がる。かと思うと、そのままの体勢で手招きした。おとなしくそれに従う。近づけば、思い切り手を引かれベッドの上に顔から突っ込む形になった。

「あはは」

鼻先でひよりが笑う。身を起こそうとした創真の首に、するりとひよりの腕が巻き付いた。間近に見えるその表情から笑顔が消え、こわばり、頬がうつすらと朱に染まる。緊張しているように見えた。

「創真さん」

「なんだ」

「キスしてください」

ひよりはそう告げてじつと創真の目を見たかと思うと、首にからめていた腕をおろし、そつと瞼を閉ざした。創真はわずかに逡巡したが、そうか夫婦だったと思出し、ひよりの顔の横に肘をつくと半ば彼女に多い被さる体勢となった。ぎしりときしんだスプリング

に、ひよりが息をつめる。やはり緊張しているようだ。こわばったままの頬を撫でれば、彼女が目を閉ざしたまま少しだけ笑った。そこに唇を落とす。やわらかな感触を確かめたのち離れれば、開かれた瞳と目が合った。

「……………」

「……………」

わずかな沈黙の後、ひよりが両手で顔を覆った。

「あの、わたしから言っておいて、何ですが……………恥ずかしいです…

…

「……………すまない」

とりあえず謝ることにした。ひよりがくすくすと肩を揺らす。両手をどけた彼女は、まだ赤い頬のまま、ふわりと笑んだ。

「創真さん、好きです」

キスをすることは恥ずかしくて、好意を伝えることは恥ずかしくないのだろうか。そんなことを疑問に思った。

scene:2 「5」

キッチンが片づき、寝室にもまだ未開封の段ボールがあるもの、ずいぶん物が増えた。

ひよりの思い通りになったらいいキッチンは、無機質さはどこへやらずいぶんと華やかになっていた。オーレンジをベースとした配色は見ているだけで明るい。

そのキッチンで鼻歌まじりに料理をし、二度目の手料理をご馳走になった。ひよりは「これから毎日おいしいごはんを作りますね」とにこにこしていた。実際に、彼女の作る料理はおいしかった。

「創真さん。お仕事なんですけど、まだ続けていてもいいですか？」
「ああ」

「でもおうちのこともしたいので、勤務時間を五時間に減らしてもらおうと思うんですけど」

「仕事が好きか」

創真の収入は同世代のサラリーマンの倍はある。二人で生活するには充分すぎるほどだ。そのうえで働くというのだから、金銭的な問題ではないのだろう。ひよりがうなずく。

「楽しいんです。花屋さんで働くの、ずっと憧れてて」

「そうか。ひよりの好きにするといい」

「はい」

それから他愛もない会話をし 実際には、ほとんどひよりがしゃべり、創真は相づちを打つばかりだった 食事を終え、片づけは二人で行った。長月の助言を忘れず料理への礼を伝えれば、ひよりはよほど嬉しかったのか終始にこにこしていた。

ひよりが入浴しているあいだ、創真は読みかけの本に目を落としながら、明日の予定を考えていた。

式本部の地下には、様々な施設がある。トレーニングジム、射撃場、道場、実験室、その他よくわからないもの。すべて暗殺を滞り

なく行つたための下準備の施設であり、式の構成員はたびたびそこを利用し、体を鍛えるなり武器の手入れを行つたりしていた。そこで筋力トレーニングでも行つたか

視界から光が遮断される。目元をやわらかなものが覆つ。

「…………どうした」

「あれ、驚かないんですね」

創真の背後から目隠しをしたひよりは、ぱつと手を離すと、隣へ腰を下ろした。

「うーん…………創真さんって、あんまり驚いたりしないですよね」

「そうでもない」

「じゃあけつこう驚いたりしてるんですか？」

「昨夜は、驚いた」

「昨夜？」

ひよりが首を傾げる。創真はうなずいた。

「…………わたしが泣いたからですか？」

「いや…………ああ、泣かれると、どうしていいかわからない」

「ふふ。そういうときは、ぎゅって抱きしめてくれたらいいんですよ。あ、でも、わたしだけです。他の人が泣いてるときはだめですよ。頭を撫でてあげるくらいならいいですけど」

「わかった」

「それで、昨日、何にびっくりしたんですか？」

ひよりは気になるのか、興味津々に瞳を輝かせて創真をのぞき込んでくる。告げていいものか悩んだが、答えることにした。

「胸」

「胸？」

「俺の手を、触れさせただろう」

「あつ…………」

とたん、ひよりの頬が紅潮する。「だ、だって、どれだけドキドキしてるか、わかってほしかったんですもん…………」と頬を膨らませた。

「あつ、もしかして、わたしの胸が小さいから驚いたんですか!？」
今度は一転して顔を青くしたひよりに、やはり見えていて飽きない
と思いつながらも「そういう理由じゃない」と否定した。ただし、胸
が小さいことは否定しない。

「夫婦には、愛情が必要だろう」

「? はい」

「俺には、愛というものがよくわからない。だから……わからない
うちは、易々と触れるべきではないと、思う」

創真は創真なりに、世間一般でいう夫婦というものについて思案
していた。そして出した結論が、愛情というものの不可欠だった。

「創真さん……」

「間違っているだろうか」

「いえ。そんなふうに、真剣に考えてもらえて、すごく嬉しいです
ひよりが体ごと創真に向き直る。創真の手の中にあつた本を取り
あげ、扉を挟んで閉ざし、テーブルの上に置いた。顔を上げると、
じつと、どこか熱っぽい眼差しを送ってくる。

「わたし、創真さんのこと、もっともっと好きになってしまいました
た」

「それは……ありがとう」

向けられる好意のひたむきさに戸惑いながらも礼を告げれば、ひ
よりは微笑んだ。しかしすぐ、その表情は痛いほど真剣なものへと
変わる。

「絶対に、わたしのこと、好きになつてもらいます。振り向かせて
みせます。愛しいって思ってもらえるように、がんばります。だか
ら」

創真の手に、ひよりの手が重ねられる。胸も唇も、そのてのひら
も、彼女の体はすべてがやわらかだ。下手をすれば、傷つけてしま
いそうなほどに。

「そのときは……わたしに、触つて、ください」

恥じらいながらもはつきりと告げられたそれに、創真はうなずい

た。重ねられている手を反転させ、ひよりの手を握り返す。

ひよりが笑った。泣き出しそうな、満たされているような、何とも形容しがたい笑顔だった。

吐く息は白く、夜風は無遠慮に肌を撫でていく。スーツの上に羽織ったコートの襟をかき合わせながら、男は足早に歩いていた。こつこつこつと革靴がアスファルトを叩く音だけが響く。

本来ならばこの時間にはすでに家でくつろいでいるのだが、部下の失敗が原因で残業が長引き、結果として深夜に近い時間帯となつてしまった。住宅街はしんと静まり返っている。明かりのともる家々を眺め、その中でゆつたり過ごしているだろう人をうらやましく思いながら、歩調を早める。

家では妻が待っているだろう。いや、もうすでに眠っているだろうか。起きていたとしても眠っていたとしても、男にとつてどちらでも構わない。結婚して十年経つがすでに妻への愛はなく、男には浮気相手がいた。

男は、妻と別れて浮気相手と結婚するつもりでいた。妻の男に対する態度は冷たく、顔を合わせればさげすむような眼差しを向けてくる。そのような女にすでに情は持ち合わせていなかった。浮気の上での離婚となれば金は取られるだろうが、愛している女と結婚できるのであれば喜んで支払うつもりでいた。

次の角を曲がれば自宅が見える。気を緩めたそのとき、背中に焼け付くような熱を感じた。ひと呼吸遅れて激しい痛みが体を貫く。開いた口からはしかし、悲鳴が飛び出ることはなかった。喉元から水が吹き出る。胸元が濡れる。

気づいたときには地面が目の前にあつた。濡れた感触が顔の皮膚を覆う。奇妙なおいがする。男はアスファルトの上に倒れていた。痛みだけが感覚を支配する。視界に誰かの足が見えた。暗くてよく見えない。視界の暗闇はいつそう深くなってゆく。

妻だろうか。あるはずがないのに、そんなことを思った。そしてそれが、男の最後の思考だった。

任務を終えて本部へ戻るころには、時刻は午前二時を過ぎていた。あくびを噛み殺しながら社長室へ入る。

「眠そうだね」

創真の顔を見るなり、極月はそう言って小さく笑った。その手にはバインダーがあり、長い指が書類をめくるところだった。それをデスクの上に放り出すと、極月は視線を横へスライドさせる。

「何なら君も寝ていくかい」

「……遠慮する」

極月の視線の先には、傍らのソファーに身を放り出して眠る若者の姿があった。大きく開かれた口からは、くかー、と間抜けな寝息がこぼれている。

青と灰という目立つ髪色を持つ彼は、その服装もまた派手だった。色という色を散りばめたような、様々な色彩を持つ服を身にまとっている。にぎやかではあるが、不思議と雑然さは感じられない。

派手なものを愛する、熟睡している若者は式の一員であり、文月の名を持っていた。

「睦月に話があると言って必死に起きていたんだが、十分ほど前にこうなってしまったね」

「そうか」

「文月のことだから話題はひとつだろうと思っっただけ」

極月が苦笑混じりに言う。創真は首を傾げた。

「……話題はひとつ？」

「もしかして知らなかったのかい。文月の有名な話」

わずかに思案したのち、「思い出した」と返した。そして彼にしては珍しく、「迂闊だった」とおのれの行動を悔いた。極月が足を組みかえる。

「呉原さんと結婚したことは、誤りだったと思ったのかい」

「思っていない」

これには即答した。ひよりと結婚したことに關して、今のところ後悔はない。判断を誤ったとも思っていない。隣で誰かが眠っていることに対しての心配はあったが、それも杞憂に終わり、なかなか快適な日々を過ごしている。

「……ただ、結婚する前に問題を片づけておくべきだったと悔いている」

吐き出されたため息は深く、いかに切実であるか表していた。極月は肩をすくめる。

「大変だろうけど、まあ、仕方ないさ 何せ文月は、ここに入った当初から呉原さんに恋い焦がれているんだからね」

それは式内部では常識ともいえる周知の事実であり、かつてひよりに近づいた一般人を半殺しにした文月の言動を考えれば、面倒は避けて通れぬ道だった。

よだれを垂らしながらのんきに眠る若者の顔を眺めたのち、創真は決意した。

「面倒だから、帰って寝る」

s c e n e : 3 「 2 」

ばたばたと軽い足音が部屋の前を過ぎて行く。目を開くと布団が目に入った。隣で寝ていたはずのひよりの姿はなく、その形跡だけが残っている。枕元に置いておいた仕事用の携帯電話で時刻を確認すれば、午前七時を示していた。

ベッドから抜け出る。立ち上がって伸びをした後で、窓のカーテンを開いた。寒々しい色をした朝焼けがビルの合間に見える。

ひんやりとしたフローリングを歩いてリビングへ出れば、奥のバルコニーでひよりが洗濯物を干していた。手慣れた様子でできばきと片づけていく。ぼんやりと眺めていると、室内に戻ったひよりが創真に気づいた。

「おはようございます、創真さん」

洗濯カゴを抱えたまま、にこにこ笑顔で挨拶を向けてくるひよりは、先ほど見た朝焼けよりも太陽らしく思えた。

「ああ……おはよう」

「ふふ、まだ眠そうですね。昨日は遅かったんですよ、起きてて大丈夫ですか？」

「大丈夫だ」

「じゃあ朝ご飯の支度しますね」

ばたばたと軽い音をたて動くひよりを見送ったあと、創真は顔を洗うべく洗面室へと足を向けた。その途中でスリッパをつっかけることも忘れない。

顔を洗いう着替えを済ませリビングへ戻れば、香ばしいにおいが鼻孔をかすめた。キッチンに立つひよりが創真を振り返る。

「あと少しでできますよ」

その言葉のとおり、イスに腰かけ新聞に目を通すあいだ、気づけばテーブルには和食が並んでいた。香ばしいにおいは焼き魚だったのだ。

「できましたよ。新聞はひとまず置いてください」

「ああ」

言われたとおりに新聞を畳むとテーブルの片隅へ置く。

「じゃあ、手を合わせてください」

創真の向かいに腰を落着けたひよりが、両手をあわせた。創真もそれに習う。彼女はいつでも挨拶を忘れない。こうして毎回、食事の前に挨拶を行うなど、創真にとっては実に十年以上ぶりだった。

「いただきます」

「イタダキマス」

「今朝の出汁巻き卵はうまくできましたよ」

「うまい」

「えへへ、ありがとうございます」

のんびりとした朝食を終えた後の片づけは、二人で行う。片づけぐらいは自分が行うと申し出たのだが、ひよりは少し思案したのち「じゃあ、せつかくですから一緒にしましょう」と答えた。彼女いわく、一緒に何かをすることが楽しいのだそうだ。それ以来、ひよりが食器を洗い、創真がそれを拭いて片付ける役目になっている。

それからひよりは寝室に閉じこもったかと思うと、着替えと化粧を済ませて荷物を手に戻ってきた。「そろそろお仕事に行きますね」という言葉に時計を確認すれば、彼女が出勤する時刻だった。

「それじゃあ行ってきます」

「ああ」

玄関で靴を履き終えたひよりが立ち上がる。段差があるため、身長差がいつそう際立った。

「創真さん」

ひよりがじっと見上げてくる。

「どうした」

「……何でもないです。えっと、改めて、行ってきますね」

「ああ、気をつけて」

ひよりは結局、何も言うことなく家を出た。口にするほどのこと

でもなかったのだらうと結論付け、創真もまた出かける準備に取りかかる。今朝は仕事が入っていたとはいえ、ランニングを怠ってしまった。式本部まで走り、その後、地下でトレーニングを行うことにする。

最低限の荷物をポケットに押し込むと、家を後にした。

ひよりの仕事は午後一時までであり、彼女が帰宅してから共に昼食を食べる。仕事を終えてからの料理は大変ではないかと思っていたのだが、ひよりは「下ごしらえしてあるのですぐに用意できますよ」と、実際に簡単に昼食を作ってみせた。それからは、ひよりが帰宅してから昼食を作ってくれることが当たり前となっていた。

午後一時までに帰宅すれば問題はない。時刻を確認する。あと四時間はあった。トレーニングには十分な時間だ。

式本部の地下にあるトレーニングルームには、相変わらず人の気配はなかった。それでも器具に使用された形跡がうかがえるあたり、常に誰かが利用しているらしい。

施設の器具の手入れは、機械類の扱いに長けた神無月が行っている。神無月こと通称カンナは構成員の中で最年少であり、最も変わっていた。動物の耳らしきものがついたフードを被り、ごつごつとしたスニーカーを履いている。たくしあげたズボンの裾からのぞく脚は細く、しかし少年であるのか少女であるのか判別できない。常にガスマスクを装着しており、声を発することはないが、そのにぎやかな身振り手振りは雄弁に感情を物語っていた。

それだけでも充分に変人だが、何よりもカンナを変人に見せてい

るのは、その武器だった。身の丈はあろうかというほどの、大振りの電動チェーンソーである。カンナが独自にカスタムしたそれは、できる限り音を抑えた仕様となっており、チェーンソーにしては比較的静かに動かすことができる。

しかし重さは通常のそれと変わりなく、年端もいかぬ子どもには不釣り合いだった。カンナと共に任務についたことはなく、それ故に、あの瘦躯で本当に物騒な武器を扱うことができるのか疑問である。カンナと幾度か共に任務を行ったことのある長月が「あのようにはチェーンソーを扱えるのはカンナ君だけでしょうね」と言っていたところを考えるに、事実ではあるようだが。

「……………」
カンナのことを考えつつトレーニングに励んでいた創真だが、ふいにその動きを止めた。出入り口を振り返る。

「……………」
「……………」
思い浮かべていた人物が、ドア枠からひよこりと顔だけを出してこちらをのぞきこんでいた。おそらく、目が合う　何せガスマスクのおかげで顔が見えないのだ　途端、カンナの周辺に花が散らばったように見えたのは、気のせいではあるまい。

するりとカンナはドア枠から飛び出すと、創真の腹部へとタックルした。ぐりぐりと頭を押しつける。ガスマスクもまたごりごりと押し付けられ、なんとも言えない感覚だった。

「メンテナンスか」

「（こくこく）」

「お疲れさまだな」

「（ぱあっ）」

労えば、やはりカンナは周辺に花を散らせた。もしこの子に尻尾がついていたなら、はち切れんばかりに振られていたことだろう。なおもぐりぐりと押しつけてくるカンナに、創真はその肩を軽く押して忠告した。

「離れたほうがいい。今の俺は、汗くさい」

「（ぶんぶん）」

首を横に振るカンナ。その顔を覆うガスマスクを見て、においなど気にならないかと思ひ直した。

フード越しに頭を撫でてやれば、ふわふわとした髪の毛の手触りがあった。大人しく頭を撫でられるカンナはどことなく嬉しげに見えたが、すぐにはつとしたように顔をあげた。かと思うと、身振り手振りで何かを伝えようとしてくる。どこか焦燥した様子だった。

「どうした？」

カンナの左手がパーの形に開かれ、右手はピースの形を作った。

その右手のピースを、左のてのひらに当てる。七だ。

「……文月か」

「（こくこく）」

次いでカンナは、ファイティングポーズを取った。ヒュツヒュツ、と、キレのあるジャブを繰り出す。文月の名が出たところで、すでに予想できていた事態だった。

「大方、文月が俺を殴りたいんだらう」

「！」

伝わったことが嬉しいのか、カンナはパチパチと拍手をした。が、すぐにはつとして必死に創真の背を出入り口へと押す。どうやら文月に殴られることをおそれて、創真を避難させたいらしい。

しかしそんなカンナの必死の行動も、幾分タイミングが悪かった。バン！と、強い力で扉が開かれる。

「睦月イ！」

怒声と共に登場したのは、派手な若者、文月だった。深夜に見かけたときと同じ格好をしているあたり、朝まであのまま眠っていたのだろう。様々な方向へ遊んでいる髪は、寝ぐせなのかいつもどおりのセットなのかわからない。眉間に深い皺を刻み、射殺さんばかりに睨みつけてくる形相には、昨夜の寝顔の無防備さなど微塵も残っていないかった。

「一発殴らせる！」

言うより早く殴りかかってきたそれを避ける。ちなみにカンナはといえば、数歩ほど距離を保っておるおると二人を見比べていた。

「避けんなほんとむかつくなこの一月が！」

「……意味がわからん」

「一月なんて寒々しいだけじゃねーか！ 七月のほうが見るくて楽しくていいことばっかだろ！ 夏休み始まるし！ あー夏の海に行きてー！」

「……行ってこい」

キャンキャン騒ぎはじめた文月に、創真はすでに面倒くさくなっていた。そんな創真と文月の間にカンナが立つ。両腕を広げたその様は、さながら創真を守るようだった。

「か、カン太郎……！ なんてそんなヤツかばうんだよ！ どけよ！」

「（ぶんぶん）」

「そこは横じゃなく縦に首振るところだろ！」

カンナと文月は仲がいい。文月の年齢は二十歳であるらしいが、中身はまるきり子どもだ。それゆえに、十代前半ほどであるカンナと気が合うのだろう。式本部で出くわすたびに、傍目からは殺し合いにしか見えない戯れを行っている。

そんな遊び仲間であるカンナに創真をかばわれ、文月はショックを受けていた。

「いいか、カン太郎。そいつは葉月ちゃんをたぶらかした悪いヤツだ。だからオレはそいつをちょっと殴って、そのあとで葉月ちゃんの目を覚ましに行かなきゃいけないんだ」

ちよつとと言っているが、おそらく半殺しにはするつもりなのだろう。その証拠に、仕事中でも身につけている青と黒の派手な軍手を外していた。拳が武器である文月は、その威力を半減させ少しでも長く遊ぶため つまり手加減のためにいつでも軍手をはめたままだった。ちなみにこの若者には破壊嗜好があり、自身の拳

で人の体を滅茶苦茶にすることを好んでいる。ただし、あくまで強い相手に限ってであり、標的が弱いとなれば仕事を放棄するほどだった。

「……、……！」

カンナが腕を振ったり手を動かしたりする。創真にはそれが何の意味を示す動作であるかわからないが、文月は感激した様子で「カン太郎！」と声を上げた。

「おまえ頭いいな！ よしそれだ！ わかったな睦月！」

「わからない」

「勝ったほうが葉月ちゃんと一日デートだ！」

「何の話だ」

「だから、勝負だよ勝負！ オレはおまえを殴りたい、でもおまえはオレに殴られたくない。だったら、殴らない方法で勝負すればいいってカン太郎が教えてくれたんだって！」

「殴らない方法？」

文月はにやりと笑い「オレとカン太郎がいつもやってるやつで勝負だ！」と創真に人差し指をつきつけた。いつもやってるやつって何だ。そんなツツコミを飲み込んで、文月とカンナが日頃遊んでいる様子を思い浮かべてみる。

文月はカンナにパンチをお見舞いし、カンナはそれを回避しつつ、そのへんに置いてあるイスやテーブルなどを文月に投げている。その応酬は尋常でないスピードで行われており、二人の遊ぶ様子は破壊活動か殺し合いにしか見えなかった。

「……物を破壊する趣味はないが」

「ちげーしー！」

「……同僚の殺害を目論む趣味もないが」

「ちげーしー！」

文月が地団駄を踏む。その隣でカンナも同じようにしているところを見ると、創真の答えは二人の機嫌を損ねてしまったらしい。

「オレらがいつもしてんのはそんなんじゃないかって “鬼ごっこ”」

だつての！」

予想だにしていなかった回答に、創真は無表情な彼にしては珍しく、困惑を露わにした。

scene : 3 「 3 」

式本部はオフィス街の一角に居を構え、傍目からは一般企業のビルに見える。土地を含めた建物自体が極月の所有物であり、式として使用されているのは社長室がある最上階と、その下の会議室などがあるフロア、そして表向きは倉庫として利用している地階だった。ちなみに一階にはコーヒーショップがあり、二階には食堂、その他の階は様々な企業へ貸し出している。ビルの裏側には駐車場も完備されており、車で通勤する場合は利用することができた。

「この時間帯は上で一般人が働いてるから、動き回るのは地下のフロアだけな」

文月はそう言って、先ほど外した派手な軍手の左を創真へ放り投げた。軍手の下の拳には、いつ見てもテーピングがほどこされている。

「どっちの手でもいいからはめとけよ」

「はめてどうする」

「鬼ごっこに使うんだよ」

そんなこともわからないのか、と言いたげな表情で文月が答えた。もちろん創真にわかるはずもない。

「まったく、ルール説明すんぞ。まずじゃんけんして、どっちが鬼か決めるだろ。で、鬼が追いかける。そこまでは普通の鬼ごっここと同じな。ただ問題は、この軍手。鬼は相手を捕まえるだけじゃだめだ。五分以内にこの軍手を奪い取って、両手分そろえなきゃいけない。それを三セット。ちなみに、鬼は交代制だからな。軍手を奪い取る方法や、逃げる方法なんかは指定なし。相手をぶちのめして奪ってもいいし、半殺しにして逃げてもいい」

「そうか」

「ってことで遠慮なく殴りにかかるから、楽しみにしとけよ」

文月がにやりと笑う。殴らなくてもいい方法で勝負するのではな

かったか。だが楽しげに準備をする文月とカンナを見てみると、水を差すのも悪い気がした。

「あ、カン太郎、このへんのトレーニングマシンどーする？ どけとく？ 殴ったりしても大丈夫か？」

文月のパンチは一撃が重く、加えて特異体質により人一倍頑丈な骨と筋肉を持っていた。その拳から放たれる攻撃はハンマーにも匹敵し、そのような攻撃が万が一にでも機械に命中した場合、故障は免れない。文月の発言に、カンナがぺしぺしと彼を叩く。

「……！」

「うわ、怒んなって！ そんな時は修理手伝ってやるから！」

「……………！」

「え、何だよそれ、大丈夫だってオレこう見えてパソコン扱えんだぜ？ いざとなればコンセント引っこ抜けば大丈夫だろあれ……いててててっ、本気で叩くな馬鹿力！」

「カンナ。破損した機具の修理費は、霜月に頼んで文月の給料から引いてもらえ」

「（こくこく）」

「テメー睦月！ カン太郎もうなずいてんじゃねー！」

時間は少しさかのぼって、創真が式本部でひとりトレーニングに励むころ、ひよりは定時を迎えていた。

店主と同僚に挨拶をし、職場である花屋を出たところで、鞆に入れている携帯電話が鳴った。取り出して確認すれば、臯月からの電話だった。ぱっと表情を明るくすると、急いで通話ボタンを押す。

「はいっ」

「葉月……じゃなかった、今はひよりよね。元気にしてた？」

「えへへ、元気ですよ。皐月さんもお変わりありませんか？」

電話越しに聞こえる声に、ひよりは歩きながら顔をほころばせた。皐月とは、式にいたころから何かと親しくしていた。美しい外見と面倒見のいい性質を持つ彼女は、ひよりにとって憧れの人であり姉のような存在でもあった。皐月もまたひよりを妹のように可愛がり、その関係は、ひよりが引退した後も変わることはなかった。

「ねえ、これからちよつと会えない？」

「これから……ですか？ えっと……」

ひよりの頭を、家で待つ創真の姿がよぎる。しかしすぐに、彼女はうなずいた。

「大丈夫です。皐月さんに会いたいです」

「ふふ、ありがとう。せつかくだしお昼も一緒に食べましょうよ、おごるわよ」

「わあ、いいんですか？」

皐月は午後から式本部へ向かわなければならぬらしく、本部付近のお店で昼食を共にすることとなった。ひよりの働く花屋の近くにある駅から、五駅乗れば着く。待ち合わせの約束をし、電話を切った。

それから創真へ電話をかけてみたが、いくら鳴らしても彼が応じることがなかった。やがて留守番電話に切り替わったので伝言を残すと、駅へと方向転換する。

映画に夢中になっているのだろうと思っていたが、電車で揺られるうちにひよりは、創真が日頃なにをしているのか知らないことに気づいた。大抵は家にいて映画鑑賞や読書に夢中になっているが、それ以外のときは一体何をしているのだろう。

いや、それ以外にも知らないことばかりだ。食べ物の好き嫌いはないと言っていたが、それでも多少の好みはあるだろう。酒や煙草を口にする様子を見たことはないが、嗜むのだろうか。映画や読書

を趣味としているが、その中でも特にどの作品を好んでいるのだろう。

皇月との約束で緩んでいた頬がこわばり、前髪の下に隠れた眉根に皺が刻まれる。しかしすぐに、その唇は再び弧を描いた。

知らないことがたくさんあるということはつまり、それだけこれから知ってゆける楽しみがあるということだ。

そんなことを考えながら、ひよりは鼻歌交じりに改札を抜けた。

皐月はその美貌を生かした仕事を行う。標的である男の懐に入り込み、毒をもって相手の命を奪う。時間はかかるものの静穏に標的を殺す場合や、堅牢な守りを持つ相手に適していた。その過半数が直接的な方法である式において、皐月のように間接的に仕事を行う者は仕事の幅が利くこともあり重宝されていた。

駅の改札付近にたたずむ彼女は、勤務時のブランド物の服ではなく、ありふれたシヨップで販売されているような服装をしていた。落ち着いた色合いでありながらも流行を取り入れたファッションは、ブランドのそれとはまた違った魅力を惹きたてている。

日頃はファッション誌から飛び出してきたような格好であり、それゆえに人目を引くことも多いが、今の彼女は持ち前の華やかさで人目を引いていた。異性からの眼差しはもちろん、同性からも憧憬の眼差しを注がれている。

どんなに地味な格好で人混みの中にいようと、瞬時にその居所が知れる。それが皐月という女だった。

「皐月さん、お待たせしました」

駆け寄れば、振り返った彼女はつり目がちな瞳をやわらげて口角を上げた。

「今来たところよ。それより、これからは雪子って呼んでちょうだい」

「本名ですか？」

「松島雪子。戸籍上の本名だけど、これ、私自身の戸籍じゃないのよね。でもまあ、本名のようなものだわ」

駅を出て、皐月と共に歩く。

「アンタのこと、これからはひよりって呼ぶわけでしょう。ひよりとしてのアンタと、元同僚なんかじゃなく友達として接するんだから、私もちゃんとした名前で呼んでもらわなきゃね」

「じゃあ、これからは雪子さんって呼びますね。あ、創真さんや他の方の前で呼んでも大丈夫ですか？」

式に所属する者には通称として暦の和名が与えられ、以後それがその者の名前となる。各人の本名は、総括者である極月と情報の管理を行う霜月だけが知るところとなっていた。それゆえに、同僚の本名を知っていたとしても、他者の前で呼ぶことはない。素性を知られることを避けるための、手段のひとつだった。

皇月は「大丈夫」とうなずいた。

「知られて困ることはないわ。それよりアンタこそ、睦月の本名を私の前で呼んだりして……大丈夫なの？」

「創真さんに確認したんですけど、問題ないって言っていました」

「ふうん。にしても、ソウマっていうんだ。カズヤとかそんなのだと思ってた」

「あはは、なんでカズヤなんですか？」

「大学に通ってたころ、カズヤって無口な男がいたのよ。きっとそいつのせいね」

皇月が案内してくれた先は、裏通りにあるこぢんまりとした店だった。「今日のランチ」と書かれたプレートが下げられているため飲食店だとわかるが、もしそれがなければ、多少しゃれているだけの民家だと思っただことだろう。

木製のドアを開けば、からんとベルが鳴った。出迎えた店員に壁際の二人掛けのテーブルへ案内され、腰を落ち着ける。上着を脱ぎながらうかがった店内は、昼食時ということもあってかにぎわっていた。だが騒々しさはなく、個々のテーブルでひっそりと、しかし弾んだ会話が行われている。

テーブルに置いてあったメニューに目を通しながらも、女性客しかいないことに気づいた。店員が恰好いいのも理由のひとつだろう。もちろん、どれほど見目好い男だとしてもひよりが興味を抱くことはないが。

「ひよりはどれにするの？」

「えーっと……日替わりランチで」

「私もそれにしよう。ここのランチおいしいのよ」

グラスを運んできた店員へ注文し、水に口をつける。ふわりとレモンの香りがした。

「ねえ、ひより。睦月と一緒に暮らすのって、大変じゃない？」

「いえ、今のところは大変じゃないですよ。お皿洗ってくれたりしますし」

「あら意外と家庭的。ってそうじゃなくて……ほら、あいつって、ちよつと変でしょう。恋愛感情もわかってないみたいだし」

「ああ……確かに、そうですね。一緒のベッドで寝てますけど、何もありませんもん」

拗ねた気持ちを混ぜ込んで吐き出せば、皐月が眉をひそめた。

「うっわ、まさかそこまでとは……」

「手だつてわたしが言わなきゃつないでくれないままでしたし、キスだつてねだらなきゃしてくれないです」

「そんな相手、よく慕い続けていられるわねえ。私だったら嫌気が差すわ」

皐月は呆れたようにそう言っただけで、決して「女として見られてないんじゃないの」などと口にすることはなかった。それは彼女が創真という人物を理解しているからであり、そしてひより自身を女性として評価しているからこそだった。ひよりは微笑む。

「恋は盲目、ですよ。それに、追われるより追いかけるほうが好きなんです。絶対振り向かせてやるーって感じで燃えます」

「あはは、ひよりってポジティブね。私そういうところ好きだわ」「前向きがいちばんですよ」

やがて運ばれてきた料理に口をつけながら、二人は他愛もない話を続けた。仕事やプライベートの話はもちろん、ひよりの趣味である料理や菓子作りの話や、皐月のライフワークともいえるバー巡りの話など、話題は多岐に及んだ。

やがて会話も一息つくころ、皐月の携帯電話が鳴った。画面を確

認した彼女は「あら」と目を丸くした。「カナナからメールだわ」と呟く。「カナナちゃんもメールするんですか？」一抹の羨ましさを感じながら問いかければ、「これ、仕事用のよ」と手にしていた携帯電話をひらひら振った。なるほど仕事用のそれであれば、式に所属する全員の連絡先が登録されている。

「なんだか面白いことやってるみたいよ、アンタの旦那」

「創真さんが？」

泉月はいたずらな笑みを浮かべると携帯電話をくるりと回転させ、画面をひよりに見せた。

「カナナからメールがきたの　　アンタとのデートをかけて、鬼ごっこしてるって」

半ば強制的に始まった鬼ごっこは、まさしく何でもありだった。

飛んできたそれを避ける。がしゃあん！と大きな音をたててランニングマシンに衝突したそれは、ベンチプレスを始めとする様々なトレーニングに使用するフラットベンチだった。横目に伺えば双方共に若干の破損が見られる。部屋の片隅でひかえていたカナナから痛いくらいに怒気を感じるが、投げた張本人、鬼役である文月は、まったく気にしていないようだった。

「それで逃げてるつもりか！」

凶悪な笑顔で突っ込んできた文月から跳躍して距離を取る。文月の拳は、先ほどまで創真が立っていた場所をかすめ、後ろにあったウェイトマシンに衝突した。何かが破れる音と金属類が曲がる音がして、シートが拳の形にへこむ。

「ほらほら、捕まっちゃうぞ！」

俊敏に踏み込んでくる文月は、創真が間合いを測るより早くステップで距離を変えてくるため、反応しづらい相手だった。元ライト級チャンピオンだと聞いていたが、その実力は衰えるどころか危険な方向へ鋭くなっているらしい。

しかも厄介なことに、文月は機械類を殴っても痛まない拳を持っていた。特異体質であり詳しいことは当人も知らないようで、「こいつさえあれば、何だつてぶっ壊せるんだ。仕組みとか何とかどうでもいいだろ」と言っていたのを記憶している。

ジャブの後に繰り出された左フックを後退して避ける。背に壁が当たった。いつの間にかコーナーに追いつめられていた。

「食らえ！」

文月が右ストレートを放つ。創真は視界の端でそれを補足しつつ、右足で床を蹴った。左足で斜め前の壁を踏む。右足を壁につき、反動を利用し文月の背へ着地する。振り返りざま蹴りを繰り出したが、腕によってガードされた。

「いつてーえ！　なんだよおまえの脚、馬鹿力すぎるだろ！　腕すげー痛え！」

「カンナほどじゃない」

「（ぱあっ）」

「こんなヤツに褒められて喜んでんじゃねーぞカン太郎！」

文月が怒鳴ったとき、室内にアラーム音が鳴り響いた。五分にセツトしておいたタイマーが鳴ったのだ。カンナが、手の中にあつたそれを止める。

「あーくそっ！　次はおまえが鬼だ！」

「……奪えばいいんだっ たな」

「全力で来いよ、てめえなんざ軽くひねりつぶしてやる！」

逃げるでもなく突撃してきた文月に、創真はその右拳を受け止め、腕をひねり足を入れ替えた。攻撃のために創真へ向かっていた力は彼を素通りし、受け止めた右拳を支点として相手へ作用する。だん、

と派手に文月の体が倒れた。創真は掴んだまま文月の右手はそのままに腕ごとひねりあげ、両足で固めた。

「いででででで！」

腕を解放させようと文月がもがくが、抵抗するほどに痛みはいっそう増しているはずだ。抜けることがないよう両足により力を込め、目の前にある軍手を奪い取るべく手を伸ばす。

だがしっかりと握り込まれた拳を開くのは容易ではなかった。拳を使うだけあつてか、文月の握力は強い。握力より脚力が強い創真に、不安定な体勢で拳を解くのは容易ではなかった。

「いてえつつつてんだろおがああああ！！」

「うぎ、と骨の感触がした。」

とつさに両足を外し腕で防御したのが幸いした。殴られ、体が吹き飛んだのだ。両腕が痺れる。防いでいなければ、凶器ともいえる文月の拳が顔面に入っていたことだろう。両腕の痺れが鈍痛へ変わり始めるのを感じながら、体勢を整えつつ文月の様子をうかがう。

文月はだらりと下がった右肩を、左手でこともなげにはめた。息を深く吐くと、口の端を釣り上げる。

「オレの軍手なしの拳は痛えだろ。両腕、しばらくは使いものになんねーぜ」

「……その右腕も、使いものにはならないだろう」

間接を外し、再びはめたことは睦月にもある。だからこそ、その際の痛みや違和感は想像ついた。文月の持つ技の中でもっとも凶悪といえる、全力の右ストレートが放たれることはないだろう。

しかし安心はできない。文月には左腕が残っている上に、創真は両腕が痺れ、まともに動かすことができない。骨に異常はないだろうが、先ほどのように防御に使えばそのときこそ折れるだろう。

今度は創真自ら文月の懐へ入り込んだ。待ちかまえていたかのようには左拳が襲いかかってくる。更に踏み込んで避け、体をひねって背へと蹴りを叩き込む。瞬間、左頬に軽い衝撃が走った。蹴りを放った脚に、手応えらしい手応えはなかった。文月はあえて蹴りを受

け、右フックを放ってきたのだ。

ピピピピピピピピ

アラームが鳴る。軍手を奪うことができなかった。これで一勝一敗だ。

ピピピピピピピピ

「……………」

「……………」

ピピピピピピピピ

「……………」

「おいこらカン太郎！ 機械いじってねーでタイマー止める！」

「（ハッ！）」

鼻歌混じりにトレーニングマシンを調整していたカナナが、はつとしてタイマーを止める。それから文月へ身振り手振りで何かを話しかけた。

「あーうるせーな引き分けだよ。次で決まるからちゃんと見とけよ」「！」

「ま、どーせオレの勝ちだから、見なくても問題ねーけどな！」

文月は鼻を鳴らすと、創真へ向き直った。ただでさえ鋭い眼光をいつそう鋭利に細め、創真を睨みつける。

「……………おまえが葉月ちゃんを大事にできるわけねえんだよ。どうせ本気で好きじゃないんだろ。葉月ちゃんのために命かけられるってわけじゃねーんだろ」

その言葉は、創真の思考に静かな波紋を広げた。文月はなおも続ける。

「オレは本気だ。葉月ちゃんのためなら死んだって構わねえ。だから、オレは負けねえ」

「……………そんなにあいつが好きか」

「はあ？ 好きに決まってるんだろ。おまえにはわかんねーよ。恋なんてしたことねえだろ変人」

「恋……………」

「恋だよ恋。知ってるだろ。好きで好きで仕方なくて、相手のこと
思うだけで苦しくて、側にいたくて、独り占めしたくて、一緒にい
るだけで嬉しくて……おいカン太郎、爆笑してんじゃねーぞてめえ
！」

身近にあったランニングマシンの上に座り込んでいたカンナが、
身を伏せてベルト部分を叩いていた。声こそ出ていないものの、小
さく震える体と動作が笑っていることを表している。

文月は笑い転げるカンナに「てめえ後でしばく！」と怒鳴ると、
派手な色合いの頭をがりがり搔いた。「とにかく」と軽く咳払い
し、フェイティングポーズを取ると再び創真を睨みつける。

「本気のおれと、適当なおまえじゃ勝負は決まったようなもんだ。
諦めて棄権したほうがいいぜ 顔を変形させたくなきゃな！」

ひよりと別れ、仕事の打ち合わせのために皐月は式本部へと足を踏み入れる。本来ならエレベーターで会議室を目指すのだが、このときばかりは地階へと向かった。

地下へ降りるための階段へ続く扉にはロックがかけられてある。式関係者のみが持つカードキー、加えて個人を認証するための暗唱番号を入力しなければロックを解除することはできない仕組みになっている。

慣れた手つきでカードキーを通し、軽いタッチで十桁の暗証番号を打つ。かしゃんと解錠の音が響いて、ドアノブを回せば扉は重く開いた。そこからすぐに表れた階段を下って行き、たどりついた廊下の奥を指す。見えてきたドアは、人の気配を察知して開いた。

かつんとヒールの音をたてて広々としたフロアへ踏みいれば、機器の合間の床に大の字になって寝そべる文月と、その傍らで機器の調整を行っているカンナがいた。文月の側には、彼が常に身につけている軍手が散らばっている。

「なーにへばつちゃって。元気だけがアンタの取り柄でしょ」

皐月の声に、カンナはその場を放り出して彼女へ駆け寄る。引きしまった腰へぎゅっと抱きついた。皐月はそれに微笑み、フードを被ったままの頭をそつと撫でてやる。

「うつせーよ年増」

文月は寝ころんだまま、霸気なく言葉を返した。

「こんな回りくどいことしなくても、ストレートに誘えばいいじゃない。略奪愛も面白いものよ」

「……オレだつてなあ、元々そのつもりだったんだよ。けどあいつ、言っただんだけ。オレの軍手もぎ取ってから」

わずかな隙が命取りだった。創真は文月のみぞおちに渾身の蹴りを入れると、床に転がった文月から軍手を取り上げた。タイマーが

時間を告げるのとはほぼ同時だった。

「くっそお…… テメエなんか……！」

「……………」

「おれは本気だったのに、なんだって懸けれるってのに！」

這いつくばって拳を床にたたきつける文月へ、創真はこう告げた。

「……本気でなければならぬのなら、本気になろう。命をかけるければならないなら、命をかけてみせる。今はできなくとも、先では必ず、そうできるようにする」

文月は、創真がそのように多く話すのを初めて聞いた。戸惑いながらも、負けじと声を張り上げた。

「意識的にそうするってのかよ！ そんな作為的な本物じゃねーだろ！」

「確かに、本物ではないかもしれない」

「偽物の愛情与えられて、葉月ちゃんが好きと思ってるのかよ！」

創真は文月を見た。しかしそれは視線がかち合っているだけであり、実際の彼の目には、違ったものが映っているように思われた。

「今までのあいつの言動から察するに、おそらくは喜ぶ」

「っ……それで、満足かよ！ おまえは偽物の愛情与えて、葉月ちゃんはその喜んで、満足かよ！」

「ひよりが喜ぶ それ以上に必要なことなど、ないだろう」

創真は心底そう思っているらしく、「他に必要なことがあるのか」と言いたげに首を傾げた。文月が言葉を失っていると、そのまま「帰る」と言い残し、去って行ったのだった。

「あいつ……ちゃんとわかってんだぜ、ちくしょう……」

文月は吐き出すと、左手で顔を覆った。臯月は小さく微笑むと、いまごろ自宅で創真の帰りを待っているだろうひよりへ思いを馳せる。「絶対振り向かせてやる」と言っただけで笑っていた彼女に聞かせてやりたいくらいだ。

たん、と軽い音に文月を見れば、立ち上がり軍手をはめているところだった。

「まーでも、こんぐらいで諦めるオレじゃねーけどな」

「あら、落ち込んでるわけじゃないのね。せつかく慰めてあげようと思ったのに」

「げっ、それだけは勘弁!」

「なによ可愛くないわね。カンナ、やっちゃって」

「うわカン太郎やめろ! 嬉しそうに殴りかかってくんじゃねー!」

家のドアを開ければ、「おかえりなさい」とひよりが玄関まで飛び出してきた。

「お昼はごめんなさい、臯月さんと約束しちゃって」

「いや」

「臯月さんにカンナちゃんからメールが入って……フミくんと一緒にトイレにングしてたんですよね?」

「ああ」

「フミちゃんとカンナちゃん、元気でしたか?」

「ああ」

室内へ向かう創真のあとを追いかけてながら、ひよりが問いかけてくる。そういえばカンナとひよりはどことなく似ている、と思いつながら、創真は彼女を振り返った。

「ひより」

「はい」

「デートをしよう」

文月と「ひよりと一日デート」をかけて勝負をし、それに勝ったのだから、デートをしなければなるまい。決まりがあるわけでもな

いのだが、創真にはそんな思い込みがあった。

突然の誘いにひよりは目を丸くしたが、すぐに喜色を露わにした。

「ほっ、本当ですか？ わたしと創真さんがデートするんですか！？」

「そっだ」

「創真さんとデートだなんてっ……！ 夢じゃないですよね」

「現実だ」

「嬉しいです！」

ひよりは、弾けるように言って、創真の胸に飛び込んだ。嬉しさに恥じらいは吹き飛んでいるらしく、笑顔で創真を見上げる。

「どこか行きたいところってありますか？」

「映画を観に行きたい」

「ふふ、本当に映画、大好きですね。じゃあ映画の上映時間にあわせてお買い物したり食事をしたり、しましょうね」

ひよりは頬を紅潮させて言うと、身をひるがえし「お休みいつだったかな」とこぼしつつ壁にかけてあったカレンダーをチエックし始める。ひよりが好いている熊のキャラクターものカレンダーには、彼女の仕事の勤務が書き込まれており、それによると次の休みは二日後だった。

「この日はどうですか？ あ、でも、創真さんっていつお仕事入るかわかんないですもんね……第一希望はこの日で、だめだったらこの日で……あっ、映画の上映期間、大丈夫ですか？」

振り返ったひよりの目はきらきらと輝いている。デートひとつでこつも喜ぶのであれば、定期的に誘おう。内心でそう決めながら、創真はうなずく。

やはり、ひよりが喜ぶ以上に必要なことなど、ありはしないのだ。

創真は自身にその自覚はなかったが、ひよりの笑顔が、ひいては喜ぶ姿が好きだった。見ているとなんとなくいい気持ちになった。だからひよりに喜んでいてもらいたいという思いがあった。

それはまだ幼く淡い感情ではあったが、ゆるやかに恋へと近づきつつあった。

ひよりはいつでもここにこしている。料理の際は鼻歌を歌っているし、話しかければ笑顔で返事をする。ときおり、焼き魚を焦がしてしまったとか試写会の抽選に外れただとか、どうでもいい。当人には重大だという理由で落ち込むこともあるが、それでもすぐ笑顔に戻っていた。

だから彼女の怒ったところなど、見たことがなかったのだ。頬を膨らませ黙り込むひよりを前に、創真は途方にくれていた。

ことのきっかけは、先日約束したデートが反故になったことにある。第一の候補だったその日、運悪く仕事が入ってしまった。手の空いている構成員が創真しかおらず、他の者に交代してもらおうこともできなかった。ひよりにそう伝えれば、彼女は寂しげに肩を落とすたものの「でも、次のお休みがありますもんね」と声を弾ませつつ、カレンダーの第二候補の日付を赤ペンで囲っていた。ひよりを落胆させずに済んだことに、創真もまた内心で安堵していた。

だが第二候補であったその日もまた、仕事が入ってしまった。本来なら水無月が担当するはずだったそれは、標的の変更という依頼主側の都合により、仕事内容までも大幅に変更されることとなった。もちろん日程も変更となったのだが、変更先であったその日、水無月にとって長期の仕事が開始される日でもあった。

夕食も済ませた夜、リビングのイスに座り映画番組を見ていたそのとき、事務用の電話に連絡が入った。

「睦月。すまないが、代わってもらえないだろうか」

極月から連絡が入るより先に、水無月は直接、創真に相談を持ちかけた。

中性的な容姿を持つ水無月は、その声もまた男にしては高めであり、女にしてはハスキーであった。カンナと異父兄弟であることが明かされているが、カンナ同様、水無月もまた外見などからでは性

別が知れない。水無月の骨格は男にしてはか細く、女にしては丸みがなかった。

ただカナナとは違い、水無月は自らの性別を女性だと明かしている。つまり彼女は、カナナの姉にあたる存在だった。

「……他の奴は」

「臯月と長月なら一週間前から長期任務に取りかかっている。カナナは学校がある。文月には弱い奴は嫌だと断られた。弥生は相変わらず療養中で、卯月は工作中。ということ、頼める相手が君しかない」

如月は掃除係であり、霜月は情報収集と事務作業が主である。極月は表の世界に顔が知れているため、よほどの事態でなければ殺しの仕事はしない。もちろん如月と霜月が仕事を行えないわけではないが、あくまで彼らには掃除と事務という役割がある。それらの役割は他の構成員がスムーズに仕事を片付ける上で非常に重要であり、代役がきかない。よって彼らに頼むことなど不可能だ。

新しい葉月が見つかっていればと、このときばかりは欠けた月を恨まずにいられなかった。

「……わかった」

「すまないな、迷惑をかける。何か用事でもあったんだろう？ 君が渋るなんて珍しい」

「いや……」

「この埋め合わせは必ずするよ。困ったことがあれば、何でも言うてほしい」

「ああ」

「霜月と極月に話は通してあるから、彼らからの連絡を待っていてくれ。それじゃあ」

通話を切り、仕事用の携帯電話を睨みつけたあとテーブルに放り投げる。ごん、と鈍い音がしたが気にならなかった。

「ごんって音がしましたけど……」

ぺたぺたという足音に振り返れば、風呂上がりのひよりが不思議

そつに首を傾げていた。濡れた髪をタオルで拭いているところを見ると、今しがた出てきたらしい。

「……………」

「何かあったんですか？」

「…………… 仕事か」

それだけでひよりには伝わったらしく、一瞬だがその表情がこわばった。しかしすぐに、いつもの笑顔を取り繕うと「しょうがないですよ」と呟く。

「お休みなら、また何回だってありますから。次の休みの日にしましょう。その日ならきつと大丈夫ですよね」

「すまない」

「創真さんが悪いわけじゃないですから。おいしいごはん作って待ってますから、早く帰ってきてくださいね」

ひよりはそう言つて微笑んでくれたが、「髪を乾かしてきます」ときびすを返したその横顔には暗い色がにじんんでいた。次の日こそは、何としても休みにしなければなるまい。創真は固く決意した。しかしあるうことが、その日もまた、仕事が入ってしまったのだ。それも、いざ出発しようとした直前で。

第一候補の日より十日後の当日、支度を済ませひよりの着替えが終わるのを待っているあいだ、仕事用の携帯電話が鳴った。

いつもなら気づいたそのときには電話を取るのだが、その日ばかりは通話ボタンを押すのにためらった。寝室のドアの向こうからはひよりの鼻歌がリビングに漏れている。顔を見ずともそうとわかるほど、上機嫌だ。「もうずっと楽しみにしてたんですよ」今朝の彼女の笑顔を思い出し、いっそ電話に出るまいかと、そんな考えさえ浮かぶ。

「…………… 何だ」

しかし結局、出た。

「おはよう睦月。君に仕事だ」

「断る」

「おや、珍しい。しかしそうもいかないんだ、君が適任でね」

「文月に回せ」

「残念なことに依頼主たつての希望でね、刃物がいいそうだ」

どうやら今回の仕事は殺害方法まで指定してあるらしい。式で刃物を扱う構成員は、睦月の他は長月とカンナ、それに水無月と弥生も相手によつて刃物を扱うことがある。最も、刃物を扱えずとも各々の方法で殺害した後にナイフで刺すなり刻むなりすればいいのだが、それは刃物を扱う者が多忙な場合にだけ行われる最終手段だった。

「……他の奴は」

「臯月と長月、それに水無月はしばらく手が放せない。カンナは学校行事で多忙だ、あの子はまだ中学生だからね。文月は連絡がつかなくて困ってる。弥生はまだ療養中で、卯月は霜月と共に出張中なんだ」

携帯電話を握る手に力が入る。ミシツ、といやな音が聞こえたのだろう。「携帯を壊さないでくれ」と極月が笑った。

「そんなわけで、睦月しかいない。データは諦めてくれ」

「……了解した」

「それじゃあデータを送るから、早急に頼むよ」

通話を終了する。手の中の携帯電話をみしみし言わせながら、創真は立ち上がった。

そして場面は、冒頭に戻る。

「……仕方ないですよね」

頬を膨らませたまま呟いたひよりは、仕方ないなどこれっぽっちも思っていない。ふわりとしたスカートの裾をぎゅぎゅうに握りしめ、眉根を寄せている。

「その……すまない」

「……いいですから、お仕事行ってください。これからなんですしよっ？」

事務用の携帯電話が鳴ったのは、ひよりの言葉が終わると同時

だった。おそらく仕事に関するデータが送られてきたのだろう。だが確認するのとはばかられ、立ち尽くしていた創真に、ひよりが再び声をかける。

「お仕事、行ってらっしゃい」

明らかかな作りものとわかる笑顔を向けたきり、ひよりは身をひるがえすとリビングを飛び出す。ばたとドアの閉じる音に一瞬、家を出て行ったのかと思ったが、音の質が違っていることを思い出して寝室に閉じこもったのだと気づく。

仕専用の携帯電話に送られてきた詳細を確認する。標的が動く時間は近い。早く家を出て、目的地へ向かわなければ。いつもならすぐに行動に移せるはずのそれも、今では気が重い。

寝室の、滅多に閉ざされることのないドアの前に立つ。室内の気配はいつものひよりのものとはどこか違っている。怒っているのか泣いているのかわからないが、好ましくない状態だ。

「……………早く、帰る」

できるだけ早く帰ってくるから、映画は無理でも買物くらいは出かけよう。

そう伝えなかったのだが口はうまく回らず、結局その一言だけをドア越しに伝えて創真は家を出た。

無駄にも思えるほど広い家には標的となる男しかおらず、地下の一室では先に侵入していた如月がすでに準備を整えていた。今回の如月は宅配業者を装っていたらしく、町中でみかける業者の制服に身を包んでいる。階段を下って入ってきた創真に軽く右手を挙げて

みせた。大柄な体躯に見合う節だった手だ。

ブルーシートの上のイスに、標的はいた。縄によって両手両足の自由を奪われ、しっかりとイスに固定されている。目隠しと猿ぐつわによって視界と言葉を奪われた男は、ずいぶん動転しているらしく、ひたすら身をよじりながら意味を成さない声を上げていた。

上着の内側からナイフを取り出す。創真が持つものの中で最も切れ味に優れたそれは、今回の仕事内容にうってつけだった。

依頼人は標的に対して深い恨みを抱いていたようであり、注文された殺害方法は残虐なものだった。指定の回数だけ相手の皮膚を切り刻み、できる限りの痛みと恐怖を与えて徐々に死へ追いやっていく。標的は創真に対して幾度「助けてくれ」と懇願しただろうか。後半になればそれは「殺してくれ」に変わり、それでも死ぬ直前には助けを求めている。

血濡れたナイフをタオルで拭いながら、これならば霜月がうつつにつけだったと思う。霜月は今でこそ式専属の情報屋として働いているが、元々は拷問を得意としていた。彼ならば依頼人の望む以上の痛みと恐怖を与えられたことだろう。出張中であつたことが悔やまれる。

刀身を拭ったタオルとは別の真新しいタオルでナイフを包む。次いで黒いジャケットを脱いで手袋を外し、如月が用意していたバッグに詰め込む。ナイフを包んだタオルも同じようにバッグへ押し込むと、ブルーシートの外に置いてある靴にはきかえ、先ほどまで履いていたブーツもまたバッグへ入れた。それを如月が受け取る。

「いつも以上に手際がいいじゃねえか。この後用事でもあんのか？」
発せられたその声は、二十代ほどの外見とは裏腹にしわがれている。声音だけを聞けば五十代、おそらく長月と同じころに思える。

如月は遺体の片づけを始めとした現場の掃除係であり、現場に似合った人物に姿形を変える。いつぞやのスタジアムではトイレの清掃員だったが、今回は宅配業者だった。そのつど特殊メイクにより顔を変え、どのような手法を以てか知らないが声音まで変え、見か

けるたびに違う顔をしている。だから創真は如月の本来の顔を知らない。知っていることといえば、今発せられている声音こそ、彼本来のものであるということだけだ。

「……私用が」

「おおかた可愛い奥さんと約束でもしてんだろ？ いいよなあ、若い奴は。オレだってあと十は若けりゃなあ、美人な姉ちゃんでもひっかけんだけどなあ」

「その姿なら二十代に見える」

「はは、だろ？ けどこれなあ、意外と肌に負担かかんだよ。厚化粧してる女の気持ちがわかるぜ」

血なまぐさい空気の中、遺体の血を拭いながら如月が笑う。現場に不釣り合いな、陽気な声だった。

「後はオレがやっつくから、さっさと帰んな。女は怒らせると怖えからなあ」

「……もう、すでに」

「はは、ビンタの一発は覚悟しとくこつた」

創真はうなずくと足早に地下室を出た。裏口から抜け出れば、高い塀が姿を現す。データにあつた監視カメラの位置を思い浮かべながら、死角となる箇所から塀を登った。一見して何も無いような塀だが、実際には風雨にさらされわずかな窪みができている。一カ所でもそれがあれば、壁を登るのは簡単だった。

通りに人の気配がないことを、そして周囲の建物から人が出てくる様子がないことを確認すると飛び降りる。

携帯電話を取り出して時刻を確認すれば、午後二時過ぎを表示していた。それにわずかに眉をひそめると、創真は常より早い歩調で大通りを目指した。

scene : 4 「 2 」

式本部へ寄ることなくまっすぐに帰宅した。極月には電話口で後日報告に向かうことを伝えてある。察したらしい彼は「まあ、がんばって」と役に立たない言葉をくれた。

ドアを開けば、しんとした空気が出迎えた。ひよりの姿は見えない。ひとまずリビングへ向かったがそこにも姿はなく、かわりに寝室から気配を感じ取った。

「……ひより」

ドアの前に立って彼女を呼ぶ。返事はない。まだ怒っているのかと思ったが、かすかな呼気にそっとドアを開いた。

「……………」

ベッドの片隅に、出かけようとしていた姿のままひよりは丸くなっていた。小柄な彼女がダブルのベッドにそうするといっそうベッドは広く、ひよりは小さく見える。

ベッドの傍らに腰掛け、規則正しい呼吸を繰り返す彼女の様子をうかがう。やはり眠っていた。閉じた目の下にはマスカラだろう黒いかけらが付着しており、目尻はうつすらと赤い。泣いていたのだろうと推測でき、創真は重いものが腹の内側にのしかかるのを感じた。

手を伸ばしかけてやめる。立ち上がると着替えを手に浴室へ向かった。人を殺してきた手でひよりに触れることはためらわれる気がしたのだ。シャワーを浴びたくらいで血臭は取れはしないだろうし、そもそもひより自身も元は同じ世界にいた。考えすぎだとわかっていたが、それでも洗い流しておきたかった。

シャワーを浴びて戻れば、ひよりは相変わらず眠りについていて。今度こそ、その髪に触れる。艶のある黒髪は、触れると柔らかな感触を指先に伝えた。今でこそひよりの髪は肩ほどであるが、昔は背まで伸びていたことを思い出す。

目元についたマスカラを拭くと、ひよりは身じろぎした。起きるかと思つたが、再び寝息をたてる。その様子は、日なたで眠る猫を連想させた。いや、猫というよりは子犬に似ている

「ふふ」

笑い声が耳をかすめた。ひよりだった。楽しい夢でも見ているのだろうか。細い腕が頼りなく動いて、その手が何かを探す。かちりと爪先同士が当たって、それから何かを探していた手が創真の指先を握った。ひよりが眠ったままでほうと息をつく。

握られた指先を見つめたあと、少し迷つてその手をしっかりと包み込んだ。もしひよりが起きていたなら、こうすることこそ彼女が笑顔になることだと思つた。

まどろんでいたことに気づいたのは、腕の中の存在が動いたからだった。

握った手を離すのもためられ、手を包んだままひよりの隣に横たわり、もう片方の腕で彼女を抱き込んだところまでは覚えていて。どうやらそのままずっとしていらしい。

「……………」

ひよりと目が合う。眠気をはらんでいた丸い目が現実に戻ってくる。ふわりとした唇を開いたが、ひよりが何かを言うことはなかった。

「悪かった」

「え……………」

「あまり、早く帰って来れなかった」

いつもどおりの仕事であれば、相手の喉元を裂いて終わればよかった。しかし今回の仕事は切り刻まなければならず、どうしても手間取った。

「何度も駄目にして悪かった」

デートに行くことはあらかじめ決まっていたのだから、根回ししておくべきだったのだ。文月はともかく他の構成員であれば、事前に伝えておけば快く代役をこなしてくれただろう。

「一人にして、すまなかった」

本来ならば二人でデートをしている時間帯だった。だというのに、ひよりを家に一人きりにしてしまい、泣かせてしまった。

握った手はそのままに、片方の腕でひよりの肩を抱き込む。柔らかな体は触れているだけで心地いい。不純な欲がわかないと言えは嘘になるが、今はまだそのときではない。

「……………」

ひよりの肩がふるえる。彼女は声を上げることなく泣いていた。以前にも、こうしてひよりはベッドの中で泣いていたことがあった。共に暮らし始めて一日目の夜だ。泣かせてばかりいる気がする。

そのときと同じように、ひよりの背をとんとんと優しくたたぐぐすと鼻をすすする音に、やはり胸のどこかが痛んだ。

「ひより」

呼びかければ、腕の中の彼女が動いた。こちらを見つめてくる目は赤く濡れている。

「聞き分けのいいふりは、するな」

ひよりは目を見張ったのち、ゆっくりとうなずいた。「ごめんなさい」と、口にする必要のない言葉を告げる。何に対する謝罪なのかわからなかったが、首を横に振って応じた。

「いま……………何時、ですか」

壁にかけてある時計を確認する。

「三時だ」

「……………えっと……………お出かけ、したい……………です」

涙に濡れたままの頬を指先でなぞる。ひよりの健康的な肌色にわずかに赤みが差したように見えた。

「行こう」

うなずけば、ひよりがはにかんだ。ようやく見ることできた控えめだが彼女らしい表情に、創真は内心で安堵していた。

朝いちばんで観に行く予定だった映画は、午後九時の上映が最終だった。海外でも評判のいい作品であり、もうじき公開終了するため観ておきたかったのだ。SFをベースとしたミステリー作品でどのような結末となるのか話題となっており、作品全体の空気も謎めいているものの暗くはない。これならひよりも楽しめるだろうと考えて選んだ作品だった。

「それまで時間がある。どこか行きたい場所はあるか」

家を出、エレベーターへ乗り込みながら問いかければ、ひよりは「それが」と視線を落とした。

「お出かけできるのが嬉しくて……たくさん行きたいところがあって、決められなかったんです」

「そうか」

「映画館はもちろん、水族館だって行きたいですし、美術館でも気になる画家の展示があつてますし、動物園でライオンの赤ちゃんを見たいですし、展望台とか温泉とか遊園地とか……挙げればキリがないくらいです」

こちらを見上げたひよりは、まだ赤みの残る目元で微笑んだ。

エレベーターが一階に到着する。ひよりの手を引いて降り、マン

シヨンを出た。冷たく乾いた風が頬を撫でる。

「どこに行くんですか？」

「ひよりが言っていた場所のうち、移動時間等を含めた上で映画の上映時刻に間に合う場所へ」

あえて場所の名を明かさずに答えれば、ひよりがくすくすと笑った。「どこへ連れてってくれるのか、楽しみです」

scene : 4 「 3 」

電車で三十分ほど揺られたのち改札を抜け、川沿いの道を歩いた先の開けた場所に目的地はあった。数年前に改築されたばかりのその建物は真新しく、いまだ土地に馴染んでいないように見える。しかし、落ち着いた色合いで統一された外観はシンプルかつ洗練された印象もあり、なるほど美術館と呼ぶにふさわしかった。

「美術館だったんですね」

大きな自動ドアをくぐるとほのかに温かい空間が迎えた。

「ここなら距離的にもちょうどいい。時間が余れば、カフェやショップで暇を潰せる」

「……嬉しいです。創真さんが、そういうふうに考えて、ここを選んでくれて」

おそらくどこを選んでも、ひよりは嬉しいと言ってくれただろう。それでもその言葉を耳にすると、まどろんでいるような心地よさを感じる。

カウンターでチケットを購入する。その際、やはりというべきかひよりは高校生に間違われていたが、童顔に加えて少女のような服装を見れば仕方がない。

「身長がもう少しあったらよかったんですけど」

身長があつたとしても、やはり学生に見えたことだろう。とは、思つても口にしない。

ひよりが見たいと言っていた展示は、世界的にも有名な西洋の画家のものだった。絵に詳しいのかと聞けば、彼女は「さっぱりわかりません」と笑顔で答えた。

「ただ、想像しながら見るのが好きなんです。百年前にこの絵を描いた人は、何を考えて描いていたんだろう、どんなふうに日々を過ごしながらこれを描いたんだろう……」

ひよりの言つたとおりに、創真もまた想像してみる。立派な枠に

飾られた絵を描いた人物は、どのような日々を過ごしたのだろう。

画家として名を残した限り、漠然とした人生の足取りは残されているが、しかしその日々の歩みに関しての詳細は当然ながらわからない。漠然とした足取りから取るに足りないことを想像するのは存外に難しく、易々とやってのけるひよりをすごいと感じた。

ひよりはゆつたりとした足取りで、絵画の一枚一枚を目に焼き付けるよう眺めていった。そう多い枚数ではないすべてを見終えるころには、一時間が経過していた。

美術館内のカフェで一休みする。外観と同じくシンプルながらも凝ったイスやテーブルが配置された店内は、メニューの中身もまたしやれたものだった。

「わあ、ケーキもおいしそうですね」

「好きなものを注文するといい」

「うーん……でも、ちよつと高いですよね、このお店。勤務先の近くに小さなケーキ屋さんがあるんですけど、そこだったらこの値段で二つは食べられますもん」

値段を確認する。今でこそ特に高価だと感じない価格だが、もし学生時代に見たなら高いと思ったことだろう。

中学までを親戚の家で過ごし、高校は寮へ入った。中学二年のころから卒業まで世話になったその家は、それまで過ごしたどの家よりも居心地が悪く、常に邪険に扱われているのを肌で感じていた。だからこそ寮のある高校を選んだ。学費は出してもらえたが小遣いなど当然もらえるはずもなく、学校が終わるとまっすぐバイト先へ向かっていった。夏休みなどの休暇は働きどきであり、もともと友人も少なかったせい、あまり遊んだ記憶はない。

そんな日々だったから、贅沢などできるはずもなかった。育ち盛りだからかひたすら腹ばかり減り、バイトで得た収入は自然と食費に費やされた。筆記用具ひとつ大切に扱い、ときおり「もういらなから」とクラスメイトがシャープペンなどをくれたとき、どれほど助かったかわからない。

じゃあ神崎くんの誕生日には、筆記用具をプレゼントしてあげるね。

なら僕は食券のセットなんてどうかな。

ふと蘇った懐かしい声に、少年と少女の面影が脳裏をかすめる。

「……創真さん？」

声をかけられ、顔を上げる。ひよりが不思議そうにこちらを見ていた。

「注文は、決まったか」

「あ、ええと……」

「値段なら気にするな」

あのころの自分が聞けば喜びそうなほど裕福になった。しかしそれはまっとうな金などではなく、人の命を踏みにじった上でのものである。それでも当時の自分は喜ぶだろうか。想像しようとしたが、うまくいかない。

「いえ、お金は大事に使わないと……たくさんあるからって、贅沢はできません。創真さんががんばって働いて稼いでくれたお金ですから」

人の命の上に成り立つものだからこそ、大事に使うのだ。そう言われたような気がした。はつとする。視線を落とし、軽率なことをしたと初めて思った。金が有り余っているからと、マンションや家具など本来なら買う必要のなかったものにつき込んだ。それはすべきことではなかったのだ。

注文を済ませて待つあいだ、ひよりは先ほどまで見ていた絵の感想を口にした。創真には思い浮かびもしないようなことばかりだった。それに相づちを打ちながら、創真は目の前の小柄な女性に敬意のようなものを感じていた。

カフェでゆっくりとした時間を過ごし、ショップへ向かう。商品は展示にあわせて変更されているらしく、先ほどまで見ていた絵画のポストカードやメモ帳など様々なものが置いてあった。

ひよりはそのひとつひとつを眺め、時には手に取り、変わったものがあれば「これ、何に使うんでしょうね」と創真に呼びかけ、笑っていた。ひよりの笑顔を見るのは心地いい。なんとなくだがいい気分になる。それがなぜなのか、創真にはわからない。

ひととおり目を通し終わるころ、三十分は経過していた。しかしそれでも上映時刻には十分な余裕があり、かといって夕飯を食べに行くにはまだ早い。

「どうしましょうか」

時刻を確認する。午後六時になる少し前だ。この時間ならちょうどいいかもしれないと思いついて、ひよりの手を引いた。

「こっちだ」

「どこに行くんですか？」

「上へ」

フロアの端にある広い階段をのぼる。吹き抜けになっているため、階段の上から一階を見下ろすとずいぶん広々として見えた。

カフェの横を通り過ぎて、奥まった通路を歩く。通路の脇には小さいながらも展示室があり、今は解放されていない。

突き当たりのドアを開ければ、緑色の芝生と広いテラスが出迎えた。ひんやりとした風が吹いて、川辺のにおいを感じさせる。

「わあ、こんなところがあつたんですね」

「もう少し」

「え？」

テラスを横切って、奥から姿を見せた階段を登る。屋上にあたるそこは足下が整えられ、ところどころに設置されたベンチには、ま

ばらながらも人影が伺えた。

「向こうだ」

物珍しげにあたりを見回すひよりを促して、川辺のベンチに座らせる。ちょうど夕日が川面を照らす時間だった。

「わあ……」

ビルの合間へ沈んでいく夕日は、その赤い光を川面へと届かせていた。川はゆるやかに流れながら光の粒を反射し、きらきらと輝いている。

ひよりはしばらく言葉もなく川を見つめ続けていた。吹く風は冷たく、静かに彼女を撫でていく。こうして見ていると、童顔であるもののやはり大人の女性に見えた。どこことなく憂いを帯びた横顔にそう感じる。それと同時に、もっと暖かい時期に連れて来るべきだったと反省した。

「寒くないか」

「……そうですね、少し、寒いです」

「室内へ戻ったほうがいい」

「もう、わかってませんね、創真さん」

ひよりが頬を膨らませて創真を見る。すぐに破顔してつないだ手はそのままに、体を寄せた。

「こうしてくつつけば、温かくなるんです」

上着越しに感じる体温は、なるほど温かい。納得していると、ひよりの謝罪が耳に届いた。

「……創真さん。今日は、ごめんなさい」

「なぜ」

「だって……お仕事なのに、拗ねちゃったりして」

「それは、俺の責任だ」

「いえ、創真さんは悪くないです。わたしだって社会人ですから、お仕事の都合でどうにもならないことがあるって、わかっています。それなのに困らせて……ごめんなさい」

かける言葉に迷って黙り込んでいると、ひよりは続けた。

「でも、悲しくって……本当に、すごくすごく、楽しみにしてたんです。それが急にダメになっちゃったから、うまく気持ちの整理ができてなくて……」

それで拗ねてしまったと、ひよりが呟いた。

「創真さんにぶつけたらだめだって思ったんですけど……結局ゲームもできなくて。ごめんなさい」

「……我慢する必要はない。言っただろう、遠慮するなと」

「そうでしたね」

ひよりがはにかむ。

「わたしたち、もう、夫婦ですもんね」

「そうだ」

「ふふ。創真さんって、思った感じと違いますよね」

「違う?」

「はい。もっと、こう……うまく言えないんですけど、そういう」と言ってくれる人だと思ってませんでした」

「……そうか」

「でも、嬉しいです。そうやってちゃんと答えてくれて。創真さんが、そういうふうに答えてくれるたびに、わたし……安心します。

この人となら、これから先もやっていけるって」

ひよりの声は体の内側に染み渡るようだった。じんわりと内側の中心からすべてへ広がっていく。

「こうして、ちゃんとお話するのって大事ですよ。やっぱり、思ってることって口にしなければ伝わりませんし。だから、創真さんも何かあったら、言ってくださいね」

「何か」

何かとは具体的にどういったことを指すのだろう。考え込んだ創真に、ひよりが「ふふ」と笑う。

「考えるようなことじゃないですよ。そのとき思い浮かんだことでもいいんです」

「そうか」

思い浮かんだこと　たとえば、カフェで思い出した学生時代のことなどだろうか。寮生活を送っていたこと、貧乏だったこと、バイトをしていたこと、それらを話したらひよりはどのような反応をするのだろうか。想像しようとするが、やはりうまくいかない。

それでもただひとつ、確かに言えることは、最後には彼女は笑顔を向けてくれるだろうということだった。ひよりならばきつと、どのようなことを話したちしても「話してくれて嬉しい」と言って微笑むのだ。

「もうそろそろ時間ですよ。行きましようか」

立ちあがったひよりが「創真さん」と手を引く。にこにこ浮かべられた笑顔は人懐っこく、場の空気を朗らかなものへ変化させる力がある。

ふいにその瞬間、合点がいった。なぜひよりの笑顔を、大して付き合いのなかったはずの彼女を好ましく思っているのか。

ひよりの笑顔は、そして彼女がかもしだす空気は、ひどく似ていた。かつての創真の友人、大崎優吾（おおさき すぐ）の恋人であり創真と優吾を結びつけるきつかけとなった人物であり、創真の感情を強く揺さぶった

少女　橘穂乃香（たちばな かの）に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6894r/>

ひとごろしに恋をした

2011年11月13日22時17分発行